

2017 7

J A P A N
APIC

No.005

Since 1975





世界の課題解決力の強化に向けて

津田塾大学と MoU 締結

特別インタビュー

上智大学

曄道 佳明 学長

APIC × 写真家フロイド・K・タケウチによる

ミクロネシア写真展「南洋の光」

太平洋・カリブ学生招待計画 2017

太平洋若手リーダー招聘計画 2017

太平洋環境セミナー 2017

次世代のグローバルリーダー育成のために

東洋大学と MoU 締結

特別インタビュー

関西外国語大学

片岡 修 教授

シリーズ第 1 回

ミクロネシアの巨石文化 —世界文化遺産ナンマトル遺跡を中心に—

関西外国語大学 国際文化研究所 片岡修 氏

カリブ若手リーダー招聘計画 2017

第 332 回早朝講演会 講師：外務省 外務事務次官 杉山晋輔 氏

第 9 回国際協力懇話会 講師：駐フランス共和国特命全権大使 木寺昌人 氏

APIC 役員インタビュー

ヤクモ株式会社 代表取締役会長

舟木 いさ子 理事

第 4 期ザビエル留学生候補者決定

ザビエル高校ベイカー神父来日 —上智大学にて改訂 MoU 署名式—

APIC 早朝国際情勢講演会

新年度事業計画

国際社会の多極化が政治、経済、軍事などの諸分野で進み、「冷戦構造」崩壊後の新しい国際関係秩序の形成を志向しつつも、なお模索が続いています。多くの国々の、そして、多くの人々の平和を希求する叫びは日々強くありますが、世界の多くの地域では依然として内戦・紛争が絶えず、激しい戦闘行為は多くの人々を犠牲にしています。世界の国々間の貧富の格差、国内の貧富の格差は平和への脅威、経済発展への障害として国際社会が協力して対処すべき課題となっています。頻発するテロ、地球温暖化の問題もあります。更に大きな課題は、一部大国の中には「自国第一主義」を唱える傾向があり、その影響の広まることが憂慮されています。

財団法人国際協力推進協会は、平成 25 年 4 月 1 日を期して一般財団法人に移行して以来、世界情勢についての知見を広める国際情勢講演会を毎月開催すると共に、太平洋島嶼国、カリブ海島嶼国との交流を深める友好協力事業を展開し、同地域の国々の人づくりを支援しております。事業展開に当たっては、上智大学、麗澤大学、津田塾大学、東洋大学などと学術交流協定を締結し、国際協力の分野で次世代を担う若者の育成の一端を担う努力を重ねております。その他、ミクロネシアの最優秀校ザビエル高校卒業生を対象として上智大学へ留学する制度を創設し、着実に実施しています。APIC の活動に皆様方のご支援を頂きたく、ご挨拶申し上げます。



一般財団法人国際協力推進協会
理事長

佐藤嘉恭

今号の表紙写真



ミクロネシア連邦 チューク環礁

撮影者：フロイド・K・タケウチ

Photo Courtesy
Floyd K. Takeuchi/ Waka Photos

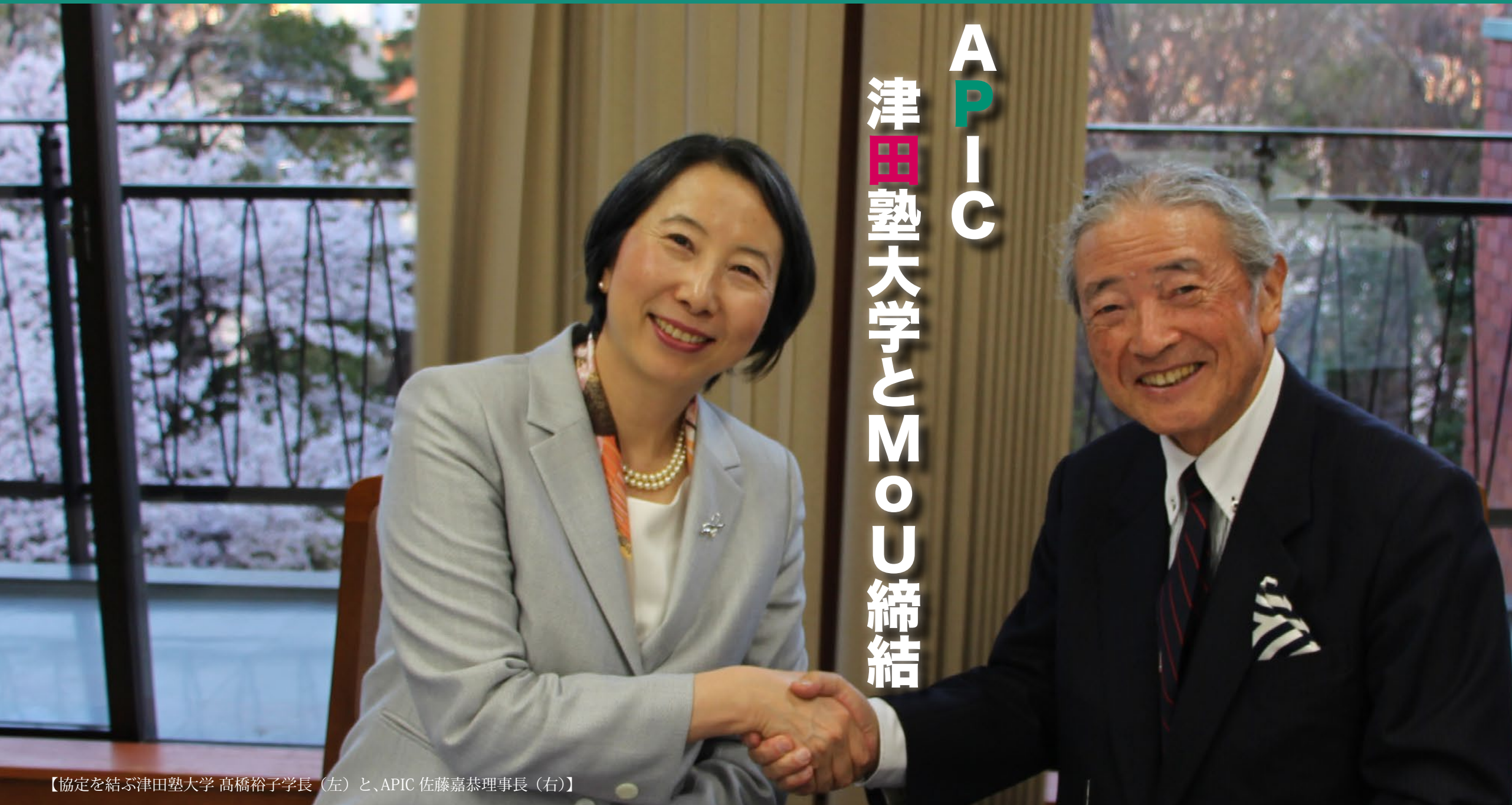
2017 年 1 月～6 月の APIC の主な動き

- 1 月 19 日 第 332 回早朝講演会（外務省 外務事務次官 杉山晋輔 氏）
- 1 月 28 日 太平洋・カリブ学生招待計画 2017 を実施（～2 月 1 日）
- 2 月 2 日 上智大学より 2 名のインターン生を受け入れ（～2 月 28 日）
- 2 月 13 日 第 9 回国際協力懇話会（駐フランス共和国特命全権大使 木寺昌人 氏）
- 2 月 16 日 第 333 回早朝講演会（独立行政法人国際協力機構 副理事長 越川和彦 氏）
- 3 月 7 日 マーシャル諸島にて環境セミナー開催
- 3 月 16 日 第 334 回早朝講演会（外務省 中東アフリカ局局长 上村司 氏）
- 3 月 26 日 太平洋若手リーダー招聘計画 2017 を実施（～4 月 2 日）
- 4 月 7 日 津田塾大学との教育連携に係る包括的な協定（MoU）締結
- 4 月 15 日 カリブ若手リーダー招聘計画 2017 を実施（～4 月 23 日）
- 4 月 20 日 第 335 回早朝講演会（前駐ベトナム社会主義共和国特命全権大使 深田博史 氏）
- 5 月 12 日 ミクロネシア写真展『南洋の光』開催（～6 月 9 日）
- 5 月 18 日 第 336 回早朝講演会（外務省 国際協力局長 山田滝雄 氏）
- 5 月 29 日 ザビエル高校及び上智大学との連携協定（改訂）署名式
- 6 月 8 日 西インド諸島大学ケイプヒル校（バルバドス）学長招聘計画を実施（～6 月 18 日）
- 6 月 15 日 第 337 回早朝講演会（外務省 アジア太平洋局南部アジア部長 梨田和也 氏）
- 同日 東洋大学との教育連携に係る包括的な協定（MoU）締結

4月

この度国際協力推進協会（APIC）は、津田塾大学と教育連携に係る包括的な協定（MOU※）を締結しました。本協定は、APICと日本の大学との間に結ばれる協定として、上智大学、麗澤大学に続く3つ目のMOUとなります。

APIC 津田塾大学とMOU締結



【協定を結ぶ津田塾大学 高橋裕子学長（左）と、APIC 佐藤嘉恭理事長（右）】

2017年4月7日、国際文化会館で津田塾大学とAPICの教育連携に係るMOU締結式が行われ、津田塾大学関係者6名とAPIC関係者7名が参加しました。

この協定により、①津田塾大学とAPICは教育活動および研究活動において相互に情報交換を行うこと②津田塾大学が開催する講義やシンポジウムへAPICから講師を派遣すること③APICにおいて津田塾大学の学生をインターンシップとして受け入れること④国際社会における相互理解の推進、および、開発途上国の開発問題等に関するセミナーなどを共同で実施することなどが合意されました。

佐藤理事長は、署名式の挨拶の中で「歴史ある津田塾大学とのMOU締結は非常に有意義なこと。国際協力の実践や学びのために、同大と協力関係を深めていきたい」と述べました。また、高橋同大学長は「21世紀を生き抜く次世代の女性が、本連携による教育を通して、国際的に活躍する有為な人として成長することを願っています」と話しました。

1900年、津田梅子によって「女子英学塾」として創立された津田塾大学は、今年度（2017年度）総合政策学部の開設を経て新たな転換期を迎えています。創立117周年と長い歴史を築いてきましたが、外国語の修得に裏付けられた幅広い知識と教養を基にした教育理念は変わらずに大切にされてきました。地域社会と国際社会の双方で貢献できる「オールラウンド・ウーマン」を育

てるという建学の精神に基づいた教育を受け、多くの学生が現代の国際社会の問題に対して多角的に考察する力を養っています。

国際情勢がより一層複雑化する現在、国際社会というマクロな世界には、ミクロな問題が多様に顕在化し、多面的な国際協力の役割は欠かせないものになっています。国際協力の推進のための一役を担うAPICと、世界での課題解決力を強化する津田塾大学が連携し、その相互補完関係を強めながら広く社会に貢献する次世代を育成することができれば、今回締結された連携協定の意義は一層高まることと考えます。長い歴史を持つ津田塾大学との協力は、APICにとって大変意義深く、今後国際協力・国際交流の幅広い分野において、双方の協力が促進されるよう、同大との連携を強化していきたいと思っています。（大高）



【署名式に出席した津田塾大学、及びAPIC関係者】

上智大学 新学長就任にあたって

上智大学

曄道 佳明 学長



上智大学とAPICは、2014年12月に教育連携に係る包括的な協定（MOU）を提携するなど、協力関係を強めています。今回は上智大学 曄道佳明新学長に、これから上智大学が目指すもの、さらに、APICとの関係についてインタビューしました。

【聞き手：APICインターン生 馬場 武井（上智大学）】

Q1・上智大学の学長就任にあたり、理想の上智大画像を教えてください。

上智の教育がこれまでの変遷の中で培ってきた上智大学像というのは、非常に先見の明がありグローバル化の時代だからといって変わってくるものではないと考えます。

しかし、近年短期的に見ても先行きが悪い時代になり、このようなグローバル化した状況に対応できる人をどのように育て輩出すべきなのかということは、今の取り組みとして積極的に変わっていくかなければならないと思っています。地球上を見ると、ローカルな事情とグローバルな取り組みのアンバランスから生じた問題が多々あります。グローバルな視野とローカルな視点を併せ持つ国際社会を俯瞰できる人を育てることが、上智大学全体の教育理念です。

なおかつ基盤にあるのはやはりキリスト教ヒューマニズムという人間教育であり、「他者のために、他者とともに」という精神です。まさに今、そういった上智大学の精神を持ったソフィアンが社会で活躍する本當にうってつけの時代になっていると思います。豊かな人間性を備え、グローバルな視野を持ちつつローカルな視点にも心配りができる人たちを輩出することが上智大学像だと思います。

そして、上智大学の卒業生には、常に他者とともに

に自分はあるのだという意識を持って、例えばビジネスの世界であっても社会への還元や共生社会の実現を考慮した事業展開を考えてもらいたいと思います。

Q2・地球規模の視点から地域を捉えるという「グローバル」の概念を持った人を育てるための具体的なプロジェクトや取り組みを教えてください。

例えば授業で言えば豊田通商やアフリカ開発銀行との連携講座の「アフリカにおける開発援助とビジネス展開」があります。国際協力が行われると支援をする立場に立つというのが一般的ですが、ただ寄付をするのではなく、現地が独り立ちできるように仕組みを積極的に創っていくかなければなりません。アフリカ開発銀行はグローバルな立場からローカルな地域への投資を促す仕組みを担い、豊田通商は現地でビジネスを展開することにより現地の人たちの

雇用を創出する立場にあるわけです。それらがどのように組み合わせられて、グローバルな視野からのローカルな経済の活性化が実際に行われるようになるのかということを学べる科目です。

また、上智大学のプログラムはもちろん一つ一つでも有意義ですが、トータルで考えてもらうように設計されています。例えば、「国連集中研修プログラム」のように世界レベルの政策決定機関について学ぶ研修がある一方で、ベナンでの「アフリカに学ぶ」のように我々が支援をしなければということを想起する地域に行くスタディーツアーがあります。私はこれらを両方経験してほしいと思っています。なぜなら、現地の状況や現地の人たちのニーズと、国際機関としてトップレベルで政策が議論される現場の両方を見ることで、この政策はいつになれば現地の人たちに届くのかということや、ここで打ち出された謳い文句は本當にその人々にとって有効であるのかということを考えられるようになります。このように違う側面を持ったプログラムをトータルに考えてデザインすることが、今、上智大学が重点的に取り組んでいることです。

Q3・曄道学長が考えるグローバル人材とはどんな人材ですか。

よく言われるグローバル人材の定義は、語学やコミュニケーションの能力があり、異文化や他宗教などの多様性を認め合うことができる人だと思っています。

しかしそれらは素養であり、上智大学の学生にはぜひグローバル社会を展望する力と自分自身を展望する力を同居させるという次なるステップに移って

もらいたいと考えます。短期的にも見通しが悪い時代だからこそ、今展望しなければという気概を持つことがこれからのグローバル人材にとっても必要なキーワードだと思っています。ですから上智大学の教育は、どのように展望する力を身につけられるかということを意識しているのです。

例えば一般的に途上国支援というと、先進国と同じ状態を実現できるようにあらゆる社会制度や技術の導入が行われているのが現状です。しかし途上国にも将来があるわけですし、本當に今の欧米や日本の状態になって良いのかという視点が抜けています。つまり物事を展望するというのは他者のケースに置き換えて考えるということです。そしてその展望する力というのは、自分自身を展望する力でもあります。進化し続ける時代を見据えて、どのようなスキルや論理、あるいは知識を大学4年間で身に付ける必要があるのか、それは本當に自身が社会の中核になったときの備えになるのかを分析し考えることが求められます。

Q4・グローバル・インターンシップ制度を創設されましたが、学部学科の学びとの関係についてどのように考えますか。

学生にとって学部学科のカリキュラムを受けて学位を取ることが大学で一番重要ですが、これには2つの側面があります。1つは専門性を身に付けるということです。学生が将来社会に出て人と議論する時にか、お互いに何をバックグラウンドに話しているのかという信頼関係につながります。もう1つはものを考えるプロセスを身に付けるということです。それぞれの専門的な立場から物事を創造的に解決するた

略 歴

1994 年 東京大学生産技術研究所・助手
1998 年 上智大学理工学部機械工学科・助教授
2004 年 上智大学理工学部機械工学科・教授
2008 年 上智大学理工学部機能創造理工学科・教授
(学部改組)

2004 年 上智大学学生部長補佐
2005 年 上智大学学生局学生センター長
2006 年 上智大学ボランティア・ビューロー担当主任
2008 年 上智大学理工学部機能創造理工学科長
2010 年 上智大学学事局入学センター長
2011 年 上智大学学務担当副学長
2014 年 学校法人上智学院グローバル化推進担当理事補佐
2015 年 上智大学国際協力人材育成センター長
2017 年 上智大学長

※ 2017 年 7 月現在

めに踏むべき手順がわかるようになります。そしてそれらを実社会で発揮する場がインターンシップです。上智大学の場合はとりわけ、3週間あるいは4週間のインターンシップを通して、実際の現場を見てグローバル展開とはいったいどのようなものかを知ってほしいと考えています。例えばメディアならば、いったいグローバルな情報がどのように日本社会に届いているのかを知ってもらいたいですし、プロフェッショナルな領域に身を置き、実際に社会人と業務をこなすことで、今まで学生が学ぶというプロセスで得た経験を発揮してほしいと願っています。

Q5・ご自身の経験を踏まえて、理系学生に期待する国際協力について教えてください。

国際協力において技術協力は非常に大きい役割を果たすので、理系学生には技術協力で将来的な意味での人材育成に貢献することを期待しています。

私自身は、理系の学生がモノ作りや製造業に携わるのは王道でももちろん良いとは思いますが、上智大学の学生であれば、ぜひ国際協力の分野で技術的な知識や解決力、分析力を積極的に発揮してほしいと思います。例えば私が専門にする鉄道に関しては、発展途上の地域に鉄道を敷くということは非常に大きなインパクトがあります。駅ができて町ができる、人が集まってきて雇用問題が解決されるというような仕組みができますが、理論的な根拠がないとどこに駅を配置したら良いかは分かりません。そのような点において理系ならではのモノの考え方が発揮されるのです。そのため、理系学生には自分の持っている技術を現地の人にとり提供していくかを考える

る立場に立つてもらいたいと思っています。

Q6・残すところ3年で2020年東京オリンピック・パラリンピックを迎えますが、上智大学はどのようにこれらと関わっていききたいとお考えですか。

今、上智大学では、「オリンピック・パラリンピック概論」という講義に引き続き、来年も2科目が立ち上がります。いわゆる教養教育では、オリンピック・パラリンピックについて知る、あるいはそれらを通して社会の共生という課題やユニバーサルマナーについて知るといったプログラムが展開されま



【暁道学長と聞き手の上智インターン生たち】

【インタビューに臨む暁道学長】



上智大学は学部教育としては珍しく地域研究のレベルで世界の大半を網羅しています。しかし今、APICと連携して関わらせていただいているミクロネシアやカリブ地域は、なかなか今まで大学教育に取り込むことができなかった地域なのです。APICとの連携関係により、これらの地域も教育の題材あるいは研究の対象とすることができ、特に環境について上智大学から発信できるようになったことは本当にありがたいことです。やはり、近いようで遠いという存在が実は一番遠く、おそらく他の大学ではなかなか真似できないプログラムだと思います。ミクロネシアやカリブ地域に目が行き届く、あるいはそのような地域の学生と交流できるというのは本当に貴重ですから、二国間の学生交流をAPICとご相談しながら強化していきたいと考えています。

Q8・ミクロネシア・エクスポートジャーニー（単位付き）に参加する学生は上智大学の代表として派遣されますが、特にどのようなところを見て来てほしいとお考えですか。

少々月並みで稚拙に聞こえるかも知れませんが、私はミクロネシアの学生たちの夢を聞いてきてほしいと思います。学生交流という観点ですと、学生が東南アジアに行くことは簡単にでき、現地の現状も知っているかと思いますが、ミクロネシアの現状はほとんどの人が知らないでしょう。ましてや、実際にそこに人々が暮らし、我々と同じように生活して夢を持った若者がいるということはなかなか想起できないことです。例えば外務省に入りたいという人がいても、漁業をもっと盛り上げたいという人がいても、どちらが良いということは決してなく、同じ

重みがあります。同じ時代で同じ地球上に今生きている人たちと、自分たちの夢との間にどのような質的な違いがあるのか、またそれはなぜなのかを実感してもらいたいのです。そして彼らの夢に加えて、彼らの世界に対する危惧を聞いてきてほしいです。例えば彼らなら環境問題や海水位の上昇に対して非常に敏感な反応があるかもしれません。ですから、ミクロネシア・エクスポートジャーニーの派遣学生には、これからのグローバル社会に対してどのような不安材料を感じているのかということを現地の学生たちと議論してきてほしいと思っています。（馬場）

す。そして上智大学としては、オリンピック・パラリンピックを盛り上げるという立場とともに、理想とする共生社会の実現に向けてそれらがどのような契機や経験、体験の材料になるかという視点に立っています。なぜなら、我々が考える様な平和で豊かな共生社会をつくるための一部としてオリンピック・パラリンピックがあるという位置づけが上智大学の物の考え方だからです。そして共生社会という観点では、「他者のために、他者とともに」という上智大学の理念につながります。オリンピック・パラリンピックは全世界の人種、宗教、民族を超えた祭典ですから、その中でどのような共生社会を作っていくかを考えるにはとても良い機会になると感じています。

また、上智大学ではかなりの数の教員がオリンピック・パラリンピックの研究をしています。パラリンピックの義足の研究をしている人もいますし、競技の他言語翻訳を研究している人もいます。教員や学生にオリンピック・パラリンピックはとても大きな関心事であると思うので、もちろん大学組織としてそれらに貢献することも考えていますが、学生にとって学びの機会となることを重視しています。東京でオリンピック・パラリンピックというのは、もうこの先しばらくはくなくような貴重な機会です。で、単なるスポーツのイベントとしてではなく、スポーツを通して共生社会が実現されることの意義を考える機会にするというのが今の取り組み方です。

Q7・本年度からミクロネシア・エクスポートジャーニー（単位付き）が開設されますが、これに伴うAPICと上智大学の連携の意義を教えてください。

◆インターンを終えて◆



上智大学総合グローバル学部
2年生
馬場 葉月

APICでのインターンシップは、国際協力の実践の場を学ぶ機会であり、これからの自分の大学生生活を再考するきっかけもありました。特に、APICの事業の一つである早朝講演会へ参加させていただいた経験は忘れがたいものでした。日本の国際協力におけるトップレベルの方々が集う講演会を体験し、国際協力とは人との信頼関係や密な情報共有の上に成り立っていることを実感しました。これは、国際協力に限らず社会に出た時にも大切になってくるものです。今回学んだことをしっかりと自分の成長につなげたいと思います。

また、APICの会報作成に係るインタビューでは、インタビュー相手の「触媒」になるということを経験しました。これはAPICの佐藤常務理事からアドバイスいただいたもので、直接顔を合わせてインタビューするからこそ聞き出せることがあるというものです。限られた時間の中でこれを全うするのは難しかったですが、自分の頭でものごとを考えるというスキルの第一歩になったと思います。

2年前にお世話になったミクロネシア異文化体験ツアーから引き続き、今回インターンとしての学びの機会を与えて下さり、APICの皆様と上智大学関係者の方々に感謝いたします。今回のインターン経験を活かし、気持ちを新たに国際協力分野の勉学に励んでまいります。

【ザビエル高校の写真を眺めながら談笑するザビエル留学生とミクロネシア関係者の方々。後ろ姿はモリ前大統領】



図が丁寧に込められており、ザビエル高校の高い教育レベルの秘密を伺うことができます。二つの作品グループの鑑賞を通して、遠い南洋の島の日常が見事に描き出されていました。

写真にはタイトルと共に、作者の撮影時の心情を表した説明文が添えられており、鑑賞する者は作品をより深く味わう事ができました。多くの方々が「ミクロネシアを近くに感じる事ができた」と感想を語っていました。



【オープニングセレモニーの様子。左からAPIC佐藤理事長、写真家タケウチ氏、上智大学 曄道学長】



◆オープニングセレモニー

開催初日にはオープニングセレモニーが開催され、APIC佐藤理事長、上智大学 曄道学長、タケウチ氏といった方々が参加し、テープカットが執り行われました。佐藤理事長、曄道学長の開会スピーチでは、今回の写真展の意義に触れ、ミクロネシア連邦との友好促進について、その重要性が強調されました。

写真展では合計16枚の作品が展示されました。それぞれの作品ではチューク環礁と、ザビエル高校生の生活が映し出されており、一般的な日常から幻想的な雰囲気醸し出されていました。人々が行き交う通路に展示された作品に足を止める学生や学外からの観覧者も多く見られ、会場は賑わいを見せていました。

チューク州はミクロネシア連邦の他3州と比べても、最も発展の遅れた州とされています。そのような物質的な側面を離れて、今回作品の舞台となったチューク環礁は世界で最も美しい環礁の一つとしても知られ、その澄み透った海や環礁の自然は、多くの観光客を楽しませています。南洋に降り注ぐ光の角度によって、一枚一枚の作品が全く違った仕上がりになっていることに、観覧者は魅了されていました。

もう一つの舞台であるザビエル高校は、太平洋地域の各地から優秀な学生が集まる名門高校です。これまで

2017年5月12日から6月9日までの約1カ月間、上智大学四谷キャンパスの2号館において「南洋の光」と題した写真展が開催されました。作品の舞台はミクロネシア連邦のチューク環礁、及び、上智大学と提携を結んでいるザビエル高校です。会場には、ハワイ出身の著名な写真家フロイド・タケウチ氏撮影の作品が展示されました。写真展初日にはモリ前ミクロネシア連邦大統領も参加、さらに開会記念レセプションとタケウチ氏による講演会が開催されました。

5月 ミクロネシア写真展「南洋の光」



に多くのリーダーを輩出し、卒業生にはミクロネシア連邦のモリ前大統領やクリスチャン現大統領などが名前を連ねています。一見、どこの高校にもある光景を捉えた写真にも見えますが、よく観察すると作者の意



【オープニングセレモニーでスピーチをするAPIC佐藤理事長（右）と上智大学 曄道学長（左）】

ミクロネシア写真展

◆フロイド・タケウチ氏による講演会

◆APIC主催レセプション



写真展初日には今回の展示作品の作者であるフロイド・タケウチ氏による講演会が開催されました。当日は100人を超える聴講者が会場に足を運び、講演に耳を傾けました。マーシャル諸島で生まれ、ハワイを拠点に30年にもわたり太平洋で写真家、ジャーナリストとして活躍してきたタケウチ氏は講演会の中で「見えるものではなく、感じたものを撮る」を座右の銘としていると話し、自身の深い哲学と結びついた活動の仕方は写真家やジャーナリストを目指す聴講者にとって大きな刺激となりました。終始真剣に聞き入る聴講者に対して、ユーモアを交えながら、今回のミクロネシア写真展のそれぞれの写真の意味や、撮影した際の苦労話などについても話し、聴講者は写真展のテーマでもある現代社会における伝統の重要性につき理解を深めました。

参加者からの感想（一部）は、次のとおり。

・「私はミクロネシア諸島についてその名前しか知りませんでしたでしたが、フロイド氏の写真から伝わってくる人々や自然の力強さ・美しさに心を打たれました。今回の講演で写真の持つ力を実感したと共に、現代化していく社会の中で伝統文化の美しさやその荘厳さ、重要性を実感しました。ぜひミクロネシア諸島を訪れてみたいです。」（10代・大学生）

・「タケウチ氏が写真を撮る際、どのようなことに注意しているかがわかり興味深かった。遠い島の日常を少しかいま見ることができたと思う。」（60代・自営業）

・「ミクロネシア地域のダンサーの力強さや自然との共存が表現されているパフォーマンスに心をうたれました。私も写真家になりたいと思っていますので、今日の講演はとても勉強になりました。」（20代・大学生）

【レセプションにて】



同日、上智大学において開催記念レセプションが開催されました。タケウチ氏をはじめ、モリ前大統領、フリッツ駐日ミクロネシア大使、小田原外務大臣政務官、上智学院高祖理事長など90名を超す参列者が集いました。各人のスピーチではそれぞれがミクロネシアに対する思いや、交流の発展について話し、大変印象深い挨拶となりました。乾杯の挨拶後は参列者の間で活発な意見交換・交流が図られました。

レセプションの中盤には、現在、上智大学で学んでいるザビエル留學生の紹介がありました。その後、男声合唱団「上智大学グリーククラブ」による、合唱のパフォーマンスも執り行われました。全4曲のプログラムではミクロネシアの人々に馴染みのある「上を向いて歩こう」や「靴が鳴る」などが歌われました。フリッツ大使を始め、曲をご存知の方々も一緒に歌い、日本の歌を通じて会場は温かい雰囲気になりました。（大垣）



【合唱を披露する上智大学グリーククラブ】

写真家フロイド・K・タケウチ氏からのメッセージ（仮訳）

「太平洋を東京へ」
—フロイド・K・タケウチ—

写真家が写真を撮るのには様々な理由があります。例えば、物語を伝えたいとか、思い出を残したいとか、感情を表現したいなど、様々です。東京の上智大学において2017年5月12日から6月9日まで開催されている私の写真展「南洋の光」で展示している写真は、ミクロネシアの人にもその他の地域の人にも同様に共感してもらいたいという私の想いを表現したものです。

すなわち、写真を見た人に、チューク環礁やその周りの海と島々の、言葉では言い表せないような美しさを保護しなければと思わせる共感を与えることです。また、ウエノ島にあるザビエル高校の写真の中で、若者がベストを尽して努力している様子が示するように、写真を見た人がミクロネシアの島々は優れた教育の可能性があると感じ、共感するということです。

5月12日に行われた写真展「南洋の光」の開会式に出席した方々とお話する機会がありましたが、私は成功への第一歩を踏み出せたのかもしれません。というのは、非常に多くの方から、あの遠く離れた小さな島々の美しさに圧倒されたと聞いて私も非常に嬉しく思いました。また、ザビエル高校での学生生活で充実した生活を送っている健康で幸せそうな若者を見て心を動かされた、という方もいらっしゃいました。

私は講演会で、異文化的な写真を撮るに当たって何を訴えたいかについて話したわけですが、出席者に書いていただいたアンケートの中で、一人の方のコメントが印象に残りました。それは、「講演を聞くまでは、ミクロネシアについては名前しか知りませんでした。しかし、あなたの美しい写真に描かれた人々の強さや美しさに感動しました。写真の持つ力と、現代社会における伝統文化の美しさに気付きました。今、とてもミクロネシアに行きたくなりました。」というコメントでした。

写真家としてこれ以上嬉しいことはありません。見る者の感情を動かし、物質的な世界に対する理解を広げ、目に見えるものの先にある精神的な世界を提示することができました。

私の写真と考え方を共有する機会を与えてくれたAPICと上智大学に感謝します。

（原文は、以下のとおり。）

Bringing the Pacific to Tokyo
By Floyd K. Takeuchi

Photographers make photographs for many reasons – to tell a story, to capture a memory, to present an emotion, among others. In the case of the images in my “Tropical Light” exhibit, which runs from May 12, 2017 to June 9, 2017 at Sophia University in Tokyo, the photographs are a means to share my hope that they will inspire Micronesians and non-Micronesians alike.

Inspire them to safeguard the almost indescribable beauty of the islands and ocean in and around Chuuk Lagoon. Inspire them to believe in the potential for excellence in education in the islands, as exemplified in the images of young people striving for the best at Xavier High School on Weno Island.

Based on my conversations with people who attended the opening of “Tropical Light” on May 12, I think I may have made some successful inroads. I was struck by how many people shared with me that they were overwhelmed by the beauty of these small, far-away islands. Others were moved by the photos of healthy, happy young people living a life filled with learning at Xavier High School.

I noted the comments of one person who attended my lecture on what I try to accomplish in my cross-cultural photography. The individual wrote: “Before attending the lecture, I only knew of Micronesia by its name. I was very much touched with the people’s strength and beauty depicted in your beautiful pictures. I have realized the power of photography and the beauty of traditional cultures in contemporary societies. I now really want to visit Micronesia.”

A photographer can ask for no more—to move viewers emotionally, to broaden their understanding of the physical world, to suggest a spiritual world beyond the obvious.

I thank The Association for Promotion of International Cooperation and Sophia University for giving me the opportunity to share my photography and vision.

◆1月16日 小学校訪問
都内の小学校を訪問し、日本の基礎教育の現場を視察しました。児童による教室清掃や給食の配膳を見学し、自立性や責任感を促す日本の教育現場に関心を向けていました。また、児童と一緒に給食を食べることににより、異文化交流の時間を設けました。児童にも太平洋・カリブ地域に対する興味が湧いた様子でした。



滞在中のスケジュール	
1/4	招待学生が日本に到着
1/5	上智大学にてオリエンテーション、講義開始 (以降、平日は上智大学にて「January Session in Japanese Studies」を受講)
1/7	上野、浅草観光
1/10	JICA 訪問
1/14	鎌倉視察
1/16	八名川小学校訪問
1/18	三鷹の森ジブリ美術館視察
1/24	文科省訪問
1/25	東京ディズニールランド視察
1/31	最終発表会、フェアウェル・レセプション
2/1	招待学生帰国

◆1月14日 鎌倉ツアー
鎌倉では高徳院や、長谷寺、建長寺などを見学しました。当日は通訳ガイドも同行し、招待学生たちは鎌倉に関する説明を興味深く聞いていました。仏教と共に鎌倉幕府が栄えた背景を学びました。

◆1月7日 上野観光ツアー
上智学生によつて企画された上野観光ツアーでは、参加学生たちは午前中、上野動物園を見学し、初めて見る多種多様な動物たちに感動していました。午後はアメ横などで買い物を楽しみました。招待学生達は、観光地として有名な東京の下町を散策し、歴史を感じながら下町の風情を感じていました。

具体的な活動内容

◆1月25日 東京ディズニールランド
多くの招待学生にとっては、初めてのディズニールランドとなりました。園内ではグループに分かれて行動し、それぞれがアトラクションを楽しみました。人生初のジェットコースターやパレード、ショーを体験し目を輝かせながら「夢が叶った」と言う学生や「ディズニールランドが一番の思い出」と語る学生も多くいました。

◆1月18日 三鷹の森ジブリ美術館
三鷹の森ジブリ美術館では海外でも人気を博すスタジオジブリの世界を体感しました。アニメでしか見たことのない世界が再現された館内では、等身大のキャラクターを間近で見て、日本のアニメ制作の技術や創造性に驚いていました。サブカルチャーにも触れ、日本への関心がより深まったようでした。



本招待計画は昨年引き続き行われ、本年度で2回目となりました。招待学生たちは上智大学において「日本語・日本のメディアと現代の課題」・「日本の経済」・「日本の教育」の4つの講義の中から、必修の「日本語」の他、2つを選択し、受講しました。これらの講義では、日本人へのインタビューや、その内容をもとにプレゼンテーションを行いました。日本を題材として、自国の問題と関連させながら学びを深めることができたと思います。

キャンパス内では、上智学生が運営する国際交流団体「Global Network (GLネット)」が様々なイベントを主催しました。招待学生はこれらのイベントに積極的に参加し、書道や折り紙を通じて、上智学生との交流を深めました。終始日本語で話そうとする姿も見られ、招待学生達の意識が高いことが感じられました。

休日には鎌倉や東京ディズニールランド、三鷹の森ジブリ美術館を訪れ、また、東京近辺の観光地を巡りました。各観光地へはAPICインターン生や、過去にミクロネシア異文化体験ツアーに参加した上智学生、学生団体ユニスク・ジャパンに所属する学生なども支援のために参加し、観光がより実りあるものになりました。

本年度も1月4日から2月1日までの約一ヶ月間、太平洋島嶼国とカリブ諸国から計16名の学生を招待しました。学生たちは期間中、上智大学の短期留学プログラムに参加しました。

太平洋・カリブ学生招待計画 2017 に参加した学生の出身地域・大学

招待学生の出身国・地域	学生数	大学名
ミクロネシア連邦	2 名	College of Micronesia-FSM
パラオ共和国	2 名	Palau Community College
マーシャル諸島共和国	2 名	College of the Marshall Islands
フィジー共和国	2 名	University of the South Pacific
ジャマイカ	2 名	University of the West Indies Mona Campus
バルバドス	2 名	University of the West Indies Cave Hill Campus
トリニダード・トバゴ	2 名	University of the West Indies St. Augustine Campus
セントルシア	1 名	University of the West Indies Open Campus
セントキッツ・ネイビス	1 名	University of the West Indies Open Campus



【ディズニールランドでの学生たちの様子】



◆1月30日 フェアウェル・レセプション(報告会)

プログラムの最終日には、日本での研修の総括として、上智大学において招待学生による発表会とフェアウェル・レセプションが執り行われました。彼らが日本に滞在するなかで感じたこと、学んだことについて、グループに分かれてプレゼンテーションを行いました。学生達は学んだ日本語で自己紹介をしたり、訪れた場所や印象に残った場面の写真を取り込みながらプレゼンテーションを行いました。各グループ発表の随所に工夫が見て取れました。また、発表の中で全ての学生が、感謝の言葉を口にしており、プログラムの充実性も伺うことができました。

発表後には招待学生に対して、APIC佐藤理事長、上智大学早下学長(当時)より修了証が手渡されました。学生一人ひとりが前に出て、誇らしげに修了証を受け取りました。

発表後のフェアウェル・レセプションでは日本滞在中に出会った人々との最後の交流を行い、滞在を懐かしむと共に、再会の言葉を交わす様子が見られました。招待学生の感極まった表情は今回のプログラムが持つ可能性を意味しているようでした。

第2回目となる本プログラムも、昨年に引き続き大成功を収めました。学生レベルでの交流が促進され、招待学生と、協力してくれた日本の大学生がお互いに学びを深めることが出来ました。参加学生がAPICのプログラムで学んだことを活かし、自国においてそれらを還元することが期待されます。引き続き今後もAPICは「太平洋・カリブ学生招待計画」を通して、島嶼国の人材育成に貢献していきます。(大垣)



【最終発表会の様子(右)と修了証を受け取る学生(左)】



参加学生の声 上智大学

金原 弘恭 さん



【鎌倉にて。左から3番目が金原さん】

APICの太平洋・カリブ学生招待計画には昨年に続き、二度目の参加となりました。週末の観光や、大学での空き時間に留学生たちと会話を重ねることで、たくさんの新しい発見や学びを得ることができました。中でも私の印象に残ったのは、それぞれの留学生が英語以外の自分の国の言葉を持っていたことです。それらの言葉は英語とは全く違うものであり、彼らの国、島のアイデンティティを感じることができました。自分の文化、国に誇りを持ち日本に学びに来ている彼らと過ごす時間は私にとって非常に刺激的なものでした。また、二ヶ月後に

留学を控えている私の目には彼らの立ち居振る舞いはとてもたくましいものとして映りました。

昨年に引き続き参加して感じたことは、このプログラムには持続性があるということです。昨年参加した学生はJETプログラムや大学院進学で、また日本に戻ってきたと言っていました。そしてそのうちの何人かは再び日本に戻って来るべく実際に準備をしております。今回の学生たちからも、日本の文化や社会にとっても関心があり、もっと学びたいという声を多く耳にしました。日本で過ごした期間は一ヶ月と短いものでありましたが、その短い期間を「始まりの一ヶ月」とする力がこのプログラムにはあると思います。そして学びの場を提供するだけでなく、将来の選択肢を広げるような強烈な「経験」を学生たちに提供できることもこのプログラムの魅力の1つであると今回気がつくことができました。その経験は学生たちの心の中に生き続け、これから社会で活躍する上での原動力となっていくのではないのでしょうか。そして同じ世代の学生の一人として、人と人との絆を作るべくこのプログラムに参加し国際協力に携われたことを誇りに思います。この一ヶ月が彼らにとって日本とかかわるきっかけとなり、将来どこかで再び会えることを願っております。

参加学生の声 西インド諸島大学

ミケーラ・レジスター さん

「ジャマイカ人の冒険」(本文は、学生本人が日本語で書いたものです。)

私はミケーラ・レジスターです。ジャマイカから来ました。ジャマイカで、日本語を勉強しています。そして、日本の文化を習っています。私は日本が好きなので日本に行ったとき、本当にうれしかったです。旅行をはじめたとき、色々な思いがありました。例えば「わくわく」や「怖い」や「感謝」の思いがありました。そして、日本に行ったとき、たくさん新しいものを見ました。例えば、日本のお金と喫煙所と電車を見ました。ジャマイカには電車がないので、初めて見たとき、本当にすごいと思いました。でも、ジャマイカでの日本語の授業で日本の電車の仕組みを勉強していたので使い方は難しくありませんでした。日本のなかで、色々な場所に行きました。例えば、ジブリの美術館やディズニランドや浅草や鎌倉に行きました。本当に楽しくておもしろかったです。鎌倉と浅草では新しいことを勉強しました。浅草で初めてお寺と神社を見ました。そして、私は参拝の仕方を習いました。



【学生たちと共に。中央下がミケーラさん】

私は、ジャマイカの大学で日本語の3年生なので、日本語がよくわかりました。それでも、上野に行ったとき、迷子になりました。ですが、友達がいたので怖くありませんでした。それから、色々な場所に行ったとき、私は友達のために通訳をしました。他の国の学生は日本語がわからなかったからです。たくさん練習出来たので、楽しかったです。私の日本の冒険は本当に素晴らしい経験でした。この経験を多くのジャマイカ人に話したいです。将来、私は日本の文化をジャマイカ人に教えたいと考えています。そして、日本語が好きなので続けたいと思っています。私はこの経験を絶対に忘れません。日本が大好きです。

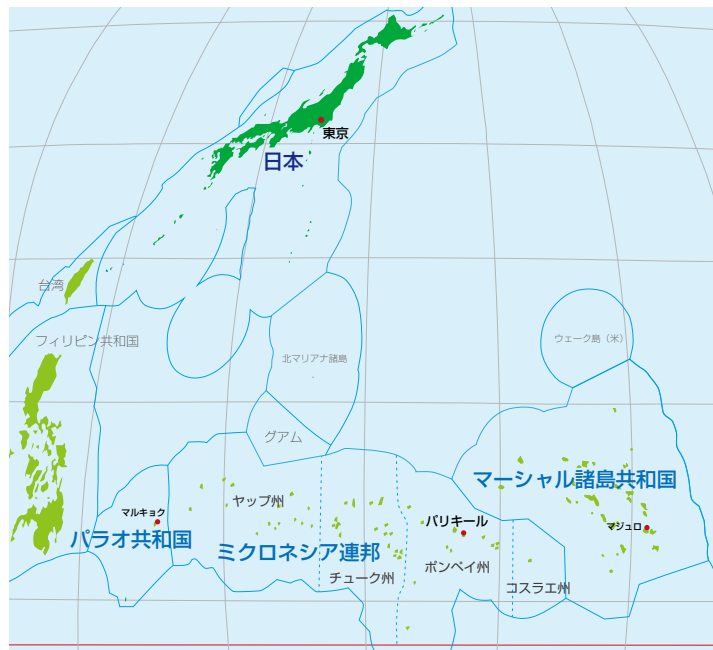
◆ **文化遺産視察～白川郷～**
プロジェクトの後半には岐阜県白川郷へ赴き、ユネスコ世界遺産登録までの道のりや、文化遺産の管理方法に関して説明を受けました。板谷副村長から白川郷としての観光政策のブリーフィングがありました。美しい自然を生かした伝統文化はミクロネシア地域にも多く存在しますが、活用されていない潜在的な部分も多く、今回の白川郷への訪問は自国の観光資源を見つめ直す機会となったようです。

◆ **APIC主催夕食会（報告会）**
プログラムも終盤に近づいた3月31日にはAPIC主催の夕食会が東京倶楽部において開催されました。当日はAPIC関係者、太平洋関係有識者、太平洋島嶼国大使館関係者などが参列し、若手リーダー達との交流を深めました。また、最後に若手リーダーからそれぞれの滞日中の印象、帰国後の抱負につき報告がありました。

滞在中のスケジュール

3/26	若手リーダーが日本に到着、都内視察
3/27	APIC オリエンテーション、太平洋諸島センター、外務省訪問、議員連盟との懇談
3/28	築地市場視察、文化庁、気象庁、上智大学大学院訪問
3/29	愛知県豊田市へ移動、トヨタエコフルタウン視察 岐阜県白川郷へ移動
3/30	白川村役場訪問、集落視察
3/31	ペットリファインテクノロジー（株）訪問、海外移住資料館、みなとみらい視察、APIC 主催夕食会（報告会）
4/1	明治神宮、浅草、東京スカイツリー視察
4/2	若手リーダー帰国

【ミクロネシア地域の地図】



【ペットリファインテクノロジー（株）にて】

は日本の官民両方における観光政策、持続的な開発の実現に向けた企業の取り組みなどを学びました。文化庁では日本の観光、エネルギー政策に関わる取り組みを視察し、気象庁では様々な自然災害が多発する我が国特有の「リスクと共存する概念」を学びました。川崎市のペットリファインテクノロジー株式会社への訪問では日本の最先端のペットボトル・リサイクル事業を視察しました。これら滞在中の様々な経験は今後の島嶼国の発展に対する大きな示唆を与えました。

太平洋島嶼国の若手リーダーにとって、日本の最先端技術や取り組みを視察し、直接学ぶことは貴重な経験となりました。プログラム中、終始真剣な態度で臨み、積極的に質問し、日本の関係者との知的な交流を促進したことは関係者からも評価されています。このような人材育成事業によって、地理的に遠い太平洋島嶼国の人々に様々な体験の機会を提供し、リーダー達により自国に還元されることが期待されます。APICは今後も同地域の将来を担う次世代リーダーの育成に携わっていきます。（大垣）

◆ **日本に学ぶ発展の知恵**
国土が狭小な太平洋島嶼国では、災害への脆弱性

◆ **日本での交流を通じて**
人的交流面では、古屋圭司 衆議院議員が会長を務める日本・太平洋島嶼国友好議員連盟との意見交換、外務省総合政策局の石兼公博局長との会談、国際機関太平洋諸島センターへの訪問等が行われました。これらの機会を通じて、日本と太平洋島嶼国が同じ島国として抱える課題や対策について意見交換が行われました。

日本と太平洋島嶼国との関係発展、相互理解の促進を目的とし、次世代を担う若手リーダーの招聘事業を実施しています。今回で第2回目となる同地域からの招聘では、パラオ共和国、マーシャル諸島から3名の若手リーダーが来日しました。プログラムでは、とくに観光・環境・エネルギー分野に重点を置いて視察を行いました。

今回招聘した若手リーダーは、カズオ・オルケリール氏（パラオ大統領府報道官）、ジャック・サミュエル・チョングム氏（マーシャル電力公社総裁）、ジェームズ・ミルン・ミヤゾエ氏（マーシャル諸島共和国海事管理局副コミッショナー）の3名です。

3~4月

太平洋若手リーダー招聘計画2017

【太平洋諸島センターにて】



から防災機能の向上、観光産業振興を念頭に置いた外資誘致による経済成長が重要視されています。このような関心事を踏まえて、文化庁や気象庁、環境関連企業への視察が行われました。若手リーダー達

3月

太平洋環境セミナー2017



2017年3月7日、APICと上智大学大学院地球環境学研究科共催の環境セミナーが、マーシャル諸島共和国の首都マジュロにおいて開催されました。本セミナーは、2015年にパラオで、2016年にジャマイカで開催されたセミナーに続き、太平洋及びカリブ地域で行われる環境セミナーとしては3回目の開催となります。

本セミナーには、APICからは荒木恵理事・事務局長が参加し、上智大学大学院地球環境学研究科のあん・まくどなど教授と織朱美教授が基調講演をしました。

まくどなど教授は、「気候変動と生物多様性の損失に向き合いながら生きること…増え続ける環境問題に対する文化的・環境的に適切な解決策を探る※1」と題した講演の中で、日本における環境保全と漁業のバランスについて話しました。具体的には、持続的な漁業を行うために、それぞれの地域で状況が異なる中、地域の漁業関係者と行政、環境の専門家が話し合っ問題を決している事例を紹介し、住民参加型の解決方法が最も有効な手段であると提案しました。行政側が一方的に規則を決めるのではなく、漁民と話し合って決めることが大切であるというメッセージが込められていました。

織教授は「ごみから資源へ…日本の容器や梱包材のリサイクルシステムの経験から学ぶ※2」という題で

講演をし、日本におけるペットボトルのリサイクルとアルミ缶の回収・再利用という身近なテーマについて話しました。マーシャル諸島では本年2月に、買い物時のプラスチックバックの使用禁止法とアルミ缶の輸入に税金を課す法律が施行されたところで、タイムリーなテーマに聴衆は熱心に耳を傾けていました。本セミナーには、光岡英行駐マーシャル日本大使が出席し、挨拶をされました。なお、セミナーの様子は大使館のプレスリリース及び現地の新聞にも掲載されました。(大高)



【右から…APIC荒木理事・事務局長、上智大学大学院織教授、あん・まくどなど教授】

6月

東洋大学とMOU締結

2017年6月15日、東洋大学とAPICは教育連携協定(MOU)の締結に合意し、東京倶楽部において、東洋大学竹村牧男学長とAPIC佐藤嘉恭理事長により署名式が執り行われました。

日本の大学の中では、上智大学、麗澤大学、津田塾大学に続いて4校目となる東洋大学とのMOUでは、グローバル人材の育成に関する情報交換やインターンシップ学生の受け入れ、共同で開催するセミナーなどについて謳われており、国際社会における相互理解を推進すべく、教育及び研究活動において幅広く連携する内容となっています。

2017年に創立130周年を迎えた東洋大学は、入学から卒業まで英語で学び単位取得が可能な学科を新設するなど、グローバル人材の育成に力を入れています。署名式での挨拶で竹村学長は「本学は文部科学省による『スーパードグローバル大学創成支援』にも採択され、グローバル化を推進している。このようなMOUを締結できたことは大変喜ばしい」と、今後のAPICとの協力事業に対する期待を述べました。

署名式の後は、MOU締結を記念してAPIC佐藤理事長主催の夕食会が開かれました。学校法人東洋大学の福川伸次理事長は夕食会での挨拶の中で「価値意識が混迷していると言える現代社会において、世界に対して理想を提案できる『人間力』を高めることが必要である。APICと協力し、東洋大学のグローバル

ル化をさらに推し進めていきたい」と述べました。今後APICは、ミクロネシア等から東洋大学への留学生派遣やインターンシップ学生の受け入れなど、MOUに基づく協力事業の充実に力を入れる予定です。(東海林)



【東京倶楽部での署名式の様子】

※1 原題 "Living with Climate Change and Biodiversity Loss: Exploring Culturally and Environmentally Relevant Solutions to Increasing Environmental Challenges"

※2 原題 "From Waste to Resources : Shared Experiences from the Japanese Container and Packaging Recycling System"

関西外国語大学

片岡修教授



略歴

1974年	龍谷大学経済学部卒業
1974年	牧方市文化財研究調査会調査員
1982年	グアム大学人類学部卒業
1996年	オレゴン大学卒業 (Ph.D. 太平洋考古学)
1994年	関西外国語短期大学助教授
2007年	ミクロネシア連邦文化財専門委員
2008年	関西外国語大学国際言語学部教授
2017年	関西外国語大学国際文化研究所研究員

※ 2017年7月現在

2016年にミクロネシア連邦ポンペイ州にあるナンマトル遺跡がユネスコ世界文化遺産に登録されました。今般、ナンマトル遺跡を長年研究されてきた片岡修関西外国語大学教授に、遺跡発掘・保存の経験や考古学に対する考えについてインタビューを行いました。

Q1・考古学に興味を持ったきっかけは何ですか。

わたしが考古学に興味を持ち始めたきっかけは、決して格好の良いものではありません。きっかけは高校2年生の16才の夏に遡ります。当時は学生運動で騒がしい時代で、多くの人たちが政治や社会に意識を高めていた時代でした。わたしといえば、何に対しても関心が持てない無気力な生活を送っていました。おそらく、この状態のわたしをご存知だったのでしょうね。後に生涯の恩師となった高校1年の担任だった瀬川芳則先生が、わたしを考古学の世界に連れ出して下さったのです。

大阪府枚方市の鷹塚山という弥生時代の遺跡の発掘調査に参加する機会をいただきました。当然ながら、考古学がどんな学問なのかを高校生のわたしは知る由もありませんでした。ただ、初めて手にしたスコップで地中の土器や石器を掘り当てた時は、まるで「頭が炸裂」したような不思議な衝撃を受けました。考古学にはまり込んだ瞬間です。

Q2・考古学のおもしろさとは何ですか。

考古学というと、発掘で見つけた建物跡やお墓や土器や石器から、文字もないような先史時代の人たちの文化や歴史を研究する学問のイメージが強いかもしれませんね。実際は、人類の誕生に始まり現在に至るまでの過去の全てが考古学研究の対象になっています。数万年前の旧石器時代の研究をしている専門家がいる一方、近代の産業遺跡や第二次世界大戦に関係する戦争遺跡の研究に従事している考古学者もいます。

確かにいろんなものが地中から見つかる発掘調査の楽しさはあるでしょう。でも、何と言っても遺跡から見つかった建物跡や墓跡や出土する土器や石器などをいろいろの方法で分析した基礎資料から、過去の文化や歴史を明らかにしていくプロセスは、まさに点と点を線に、線と線をつなげ合わせて面を作り上げていく作業です。ありきたりな表現ですが、ジグソーパズルをつなぎ合わせていくうちに次第に全体像が見えてくるような楽しさがあるのかも知れません。

Q3・どうしてミクロネシアの考古学に興味を持たれたのですか。

Q4・ナンマトル遺跡との関わりとその思いについてお聞かせください。

グアム大学人類学部に入塾して3年後に学士を取得し、いよいよ大学院。当時、太平洋の考古学を研究したいのならアメリカのオレゴン大学という時代でした。太平洋を自分のフィールドと決めていたので、太平洋考古学でその名を轟かせていたエアーズ教授に師事するため、オレゴン大学を目指しました。教授はミクロネシアのナンマトル遺跡とモアイの石像で有名なポリネシアのイースター島の研究をさ



【ナンマトル遺跡 (APIC撮影)】

れていました。修士課程在籍中に、教授からナンマトル遺跡の調査の参加を勧めていただきました。ナンマトル遺跡との関わりの始まりです。1984年のことでした。初めて目の当たりにした壮大なナンマトル遺跡の印象は強烈で、博士論文の研究対象に決めたのです。オレゴン大学を卒業し現在在籍している関西外国語大学に就職することになりました。その後もナンマトル遺跡の研究を継続し、気がつくと33年過ぎていました。まさにライフワークとなったのです。その延長上に2016年の世界文化遺産登録があります。少しは現地にお返しができたかなと思っています。「危機遺産」のお墨付きもいただいてしまったので、その脱却に向けて今後も何か貢献できることを願っています。

Q5・APICの「ナンマトル遺跡保存プロジェクト」の意義とは何でしょうか。

「危機遺産」の汚名は、遺跡の保存状態の問題と弱体な管理体制に起因しています。積み上げた巨石の経年の劣化や負荷による崩落、マングローブや巨木を含む植物の繁茂と訪問者による遺跡への影響、近年の地球温暖化の海水面上昇による遺跡への影響などが、遺跡と景観の悪化に大きな影響を及ぼしています。ナンマトル遺跡全体の保存には、国際支援を基盤とする巨大プロジェクトの立ち上げが必要となるでしょうね。一方、遺跡の重要性とその保存に対する住民の意識や認識を高めるため、教育啓蒙活動も重要な支援活動の一つとして考えられます。

APICは支援項目として①資料館や研修室など多目的使用ができるビクターセンター建設、②現地ガイドを含む人材育成、③ナンマトル遺跡の解説書

構や出土遺物の保存には保存科学など科学的な分析が多く利用されます。このように、一言で考古学といってもいろいろな専門分野が関係しているのです。将来の研究対象や分野やテーマが見つかるよう、多くの本や論文を読み、物をたくさん見て、あるいは触って、広範囲に興味と好奇心のアンテナを張り巡らして下さい。

今日、研究者の交流や情報の交換は世界レベルで展開されています。参考文献はもはや日本語とは限らないのです。また、論文や口頭発表で成果を発信するためにも、英語や自分がフィールドとする国や地域の言語をある程度身につけておくことを強くお勧めします。



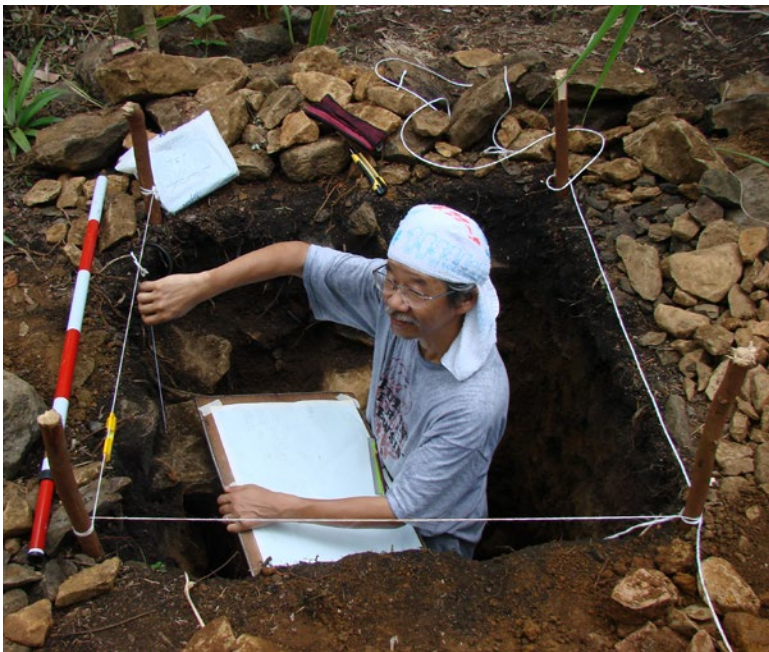
【遺跡と共に（国立民族学博物館所蔵）】

の作成、④学校教育用（特に低学年用）のナンマトル遺跡を題材にした副読本の作成をあげています。

これらは、訪問者やポーンペイ島の人たちが世界文化遺産としてのナンマトルについて理解を深め、遺跡と周辺環境の保護意識を高めるために重要な支援で、結果的に「危機遺産」脱却に大きな貢献を果たすことになるかと確信しています。

Q6・大学での考古学の位置づけとは何ですか。

大学での考古学の位置づけは、専攻コースがあるかないかによって大きく異なるでしょうね。たとえば、わたしの大学は外国語大学なので、考古学やオセアニア文化論や文化人類学などの講座は、選択科



【発掘調査中の片岡教授（国立民族学博物館所蔵）】

目で総合科目の一つです。将来の研究者や専門家を育成するというより、外国語の習得と共に世界的な視野を広げ基礎的教養を身につける科目の一つとして位置づけられます。

専攻コースをもっている大学は、考古学の学問的な意義と定義に基づき、各大学の教育方針を指針に地域性や専門性を打ち出した特徴ある講座が開講されています。考古学の関連講座は文学部で勉強できますが、文化財学科や歴史文化学科、文化財科学専攻や文化遺産学専攻や考古学・民俗学専攻など学科名やコース名はさまざまで、将来の進路を考えて大学や学科を選ぶことになるでしょうね。

卒業後の進路は埋蔵文化財保護行政関連の専門職員、博物館の学芸員、保存修復技術者、大学院に進学し研究者など、教職や専門職や研究職につながるような講座が開講されていると思います。

Q7・考古学を志す学生へのメッセージは。

考古学は遺跡から見つかる物的証拠に基づいて、人が誕生してから現在まで築き上げてきた文化や社会や歴史を理解し解釈する学問分野です。研究の基礎として発掘調査が伴い、地道な出土品の分析や実測を含む遺物整理には忍耐力と体力が求められます。そのため、どの学部にも共通するかも知れませんが、志そうとする分野を理解し興味を持ち好きだという気持ちが大切でしょうね。

人は政治や経済や宗教や芸術などさまざまな活動をするので、人を理解するためには文化人類学や自然人類学など異なる分野の研究成果を頻繁に参考にします。また、遺跡から見つかる土器の胎土分析や石器の岩石の成分分析や花粉分析などに加えて、遺



【ナンマトル遺跡の平面図（Nan Madol nomination dossier 2015 に加筆）】



シリーズ第1回

ミクロネシアの巨石文化

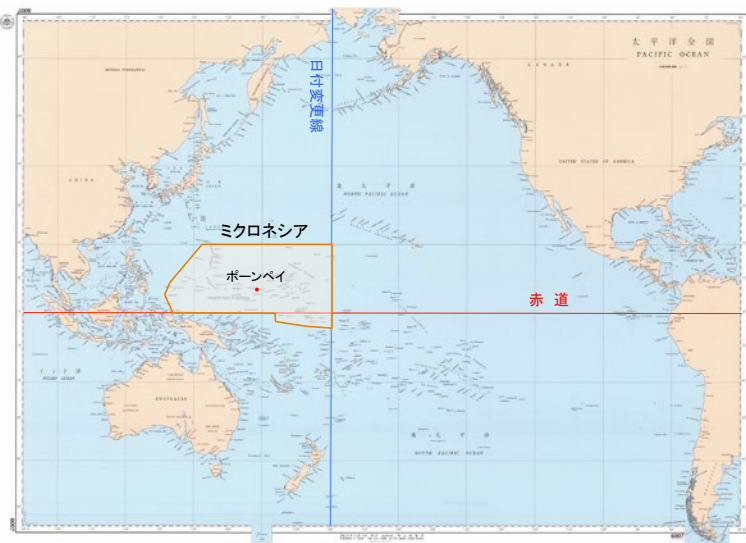
—世界文化遺産ナンマトル遺跡を中心に—

関西外国語大学 国際文化研究所
片岡 修

(片岡撮影 2014 国立民族学博物館蔵)

太平洋の歴史の時代区分は、大きく西欧人との接触を境に先史時代と歴史時代に分けることができます。前者については、各島に人が住み始めた時期や起源地が異なるため、ミクロネシア全体に共通する先史時代の年表は存在しません。また、研究の進捗が各地で異なるため、先史時代の細分化に大きな差違が生じます。後者については、支配背景が少し異なるグアム

をしています。南西のヤップ島やパラオ諸島は海溝の西側に形成された火山島です。プレート境界は安山岩線でもあり西側は主に安山岩、東側は玄武岩を起源とする島々です。これからお話しするナンマトル遺跡が築かれたポーンペイ島は安山岩線のはるか東にあり、人工島や建物やお墓の建設に使用された膨大な量の石は玄武岩ということになります(図2)。

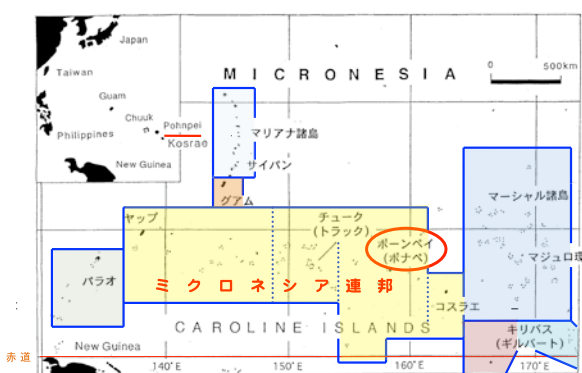


【図1 ミクロネシアの位置(海上保安庁 2008 に加筆)】

○第1期(3500年前)…西ミクロネシア
西ミクロネシアの中でマリアナ諸島は最も早く人が住み始めた地域で、それは3500年前のことです。言語学と考古学は西側のフィリピンやインドネシアとの関係性を明らかにしています。土器の比較研究はフィリピンとの強い関係がみられる一方、最近スラ

まず、ミクロネシアへの初期の人の広がりを概観してみましよう。今のところ考古学や人類学や言語学の研究は、大きく三つの異なる時期とルートで人の拡散が達成されたことを明らかにしています。また、その後に繰り返し広がられた島嶼間の交流と交易により、ミクロネシア内の広範囲に人や文化が拡散したこともわかっています。今までの研究成果(Clark 2010; 印東 2010)から、その変遷を整理すると次のようになります。

ミクロネシアへの人の拡散



【図2 ミクロネシア全図とポーンペイ島の位置】

やキリバス共和国を除き、ミクロネシアはスペイン時代(1886)、ドイツ時代(1898)、日本委任統治時代(1920)、アメリカ合衆国太平洋諸島信託統治時代(1947)を経験し現在に至っています。

はじめに

地球の表面積の3分の1を占め、月の表面積よりも広い太平洋には、大小2万5000もの島々が散在しています。グリーンランドに次いで世界で二番目に大きいニューギニアとニュージーランドを除くと、陸地面積の総計はわずか18万平方キロメートルで、23万平方キロメートルある本州より小さく、まさに海と島の世界なのです。フランスの探検家デュモン・デュルヴィユが、1831年のパリで開催された地理学会で文化・地理的な違いに基づいて三つの地域区分を提唱しました。ギリシャ語で「小さな島々」という意味のミクロネシア、「黒い島々」のメラネシア、「多くの島々」のポリネシアの三つのネシアです。多少の問題を含んではいますが、今もそれらの名前が踏襲されています。各ネシアの代表的な島として、ミクロネシアのグアムやサイパンやパラオ、メラネシアのニューギニアやフィジー、ポリネシアのハワイやニュージーランドをあげることができます。

西欧人による太平洋への進出は、伝説の黄金郷と未知の南方大陸の発見、高価な東洋産香料の貿易路確保、植民地の拡大、貿易や捕鯨とキリスト教の布教活動など、時代によって目的はさまざまでした。太平洋の発見は、1513年にパナマ地峡を横断したスペインの探検家バルボアが最初といわれています。しかし、太平洋の西回りルートで世界一周航海を達成したマゼランの1521年のグアム島発見が、その後のヨーロッパ諸国の太平洋進出を活発化させたことは間違いありません。

初めて太平洋の島々と接触したとき、すでに島々には人が住んでいることに驚きを隠せなかったようです。島民はいつ、どこからやってきてどんな生活を営んで

いるのかという素朴な疑問は、進んだ科学や技術を活用する現在の考古学や人類学や言語学などが解決しようとしている疑問そのものだったのです。

これから数回にわたって、2016年7月にユネスコ世界文化遺産の登録に決定したミクロネシア連邦のポーンペイ島に築かれた巨石を積み上げた壮大な複合遺跡ナンマトルを紹介させていただきます。ミクロネシア考古学の一端に触れてみて下さい。

ミクロネシアの地理と歴史

三つのネシアの中でミクロネシアは日本に最も近く、東方のナウル共和国とキリバス共和国を除くと、基本的には赤道の北側で日付変更線の西側に位置しています(図1)。東西約5000キロメートルあり、およそ2300の島々が散らばっています。総陸地面積は2851平方キロメートルということです。総陸地面積は川島より少し大きいくらいのサイズです。また人口は40数万人なので、日本の47都道府県の中で最小人口数57万人の鳥取県より少ないことになります(wikipedia.jp)。

伊豆半島沖に伊豆諸島と小笠原諸島、その700キロメートル南にグアムやサイパンなど15の島々から成るマリアナ諸島が弓状に連なっています。これら一連の島々は富士火山帯を形成しているため、ミクロネシア最大のグアム島はその最南端に位置していることになります。そう考えると、ミクロネシアも身近な感じがしないうか。

フィリピン海プレート東端に位置するマリアナ諸島の東側に水深1万メートルを超えるマリアナ海溝が形成されています。東側の大きな太平洋プレートが、西側のフィリピン海プレートへ衝突した沈み込みに起因

ウェシの土器との類似性も注目されています。もう一つの大きな人の流れは、東南アジア島嶼域を通過し、3300年前にメラネシアに出現したグループの拡散です。かれらは、台湾を起源とする農耕民であり漁撈民でもあるオーストロネシア語族と呼ばれる人たちです。その子孫たちは、ポリネシア東端の絶海の孤島の代名詞となっているイースター島に到達しただけでなく、南アメリカ沿岸地域とも接触していた人類で最も優れた航海士でした。

パラオ諸島の言語は、マリアナ諸島同様にフィリピンとインドネシアと関係がありますが、考古学的には異なる地域から移住が起こったと考えられています。少なくとも3000年前には人が住み始めたことがわかっています。しかし、パラオ本島のバベルダオブ島の遺跡から3400年前の年代が報告されているので、将来遡る可能性があります。ヤップについては言語系統が不明ですが、メラネシアのビスマルク諸島を起源すると推定されており、考古学的には2000年前に人が住み始めたことがわかっています。

○第Ⅱ期（2000年前）…中央および東ミクロネシア

起源をピンポイントで特定はできませんが、言語学的にも考古学的にも赤道を越えた南のメラネシアのソロモン諸島やヴァヌアツ諸島から北上してきた人たちによつてこの地域への居住が開始されたことが明らかになっています。今からおよそ2000年前のことです。西からチューク島、ポーンペイ島、コスラエ島、マーシャル諸島と広範囲に同じ時期に異なる島々から移住が起こったようです。その後、生存戦略として環礁島と環礁島、環礁島と火山島の間で交易と交流を展開するようになりました。交易は近隣の島同志の小

ラッテストーンがあります。今は1本しか立っていませんが、高さ5.9メートルもあります。もう一つは、グアムの北に位置するロタ島にあるアス・ニエヴェス遺跡です。内陸部のサンゴ石灰岩の岩盤を削り抜いてラッテストーンを作った石切場です。どういうわけか、ほぼ完成した状態で時間が止まってしまっています。立てると6.8メートルにもなる、マリアナ諸島最大のラッテストーンです。あまりにも巨大なため、これらの石柱が高床式建物の柱だったかについては、異論もありいくつかの仮説が唱えられています。

1565年にグアム島を訪れたスペインのLegazpi（Levesque 1992）は、人の高さほどの石柱上に居間や寝室をもつ建物、料理用の建物、村落共有の大型カヌーを格納するカヌーハウス、メンズハウスを記録しています。ラッテストーンの内外の発掘で、石器と貝製品（工具や装身具や漁撈具）とそれらの未製品、土器、食べ物の残骸（貝や魚骨）がたくさん見つかっています。また、頻繁に埋葬人骨が見つかります。したがって、ラッテストーンに支えられた建物の床下とその周辺で貝製品の製作、調理、食事、埋葬行為などさまざまな活動が行なわれていたことが明らかになっています（山野ほか2013）。

ラッテストーンは、マリアナ諸島先住のチャモロ族の文化のシンボルとして、そのモチーフがいろいろなところに使われています。たとえば、北マリアナ諸島自治領の国旗や、グアムでは車のナンバープレートにそのデザインが描かれています。

さて、もう一つよく知られた巨石記念物を紹介しましょう。グアムから800キロメートル南西に位置するヤップ島に、世界最大で最重量の石のお金が存在します。石貨はヤップ名でライ（Rai）と言います

規模ネットワークを基盤に、複数のネットワークとながり最終的には大規模ネットワークとして、お互いに必要な物や情報を交換しながら共存共栄してきました。島嶼間の交流は、物や言語を含む文化伝播の役割を果たしてきたことは、言うまでもありません。たとえば、火山島のヤップを政治的地位の頂点として、東へ1500キロメートル離れたチュークまでの24のサンゴ礁島との間でサウエイと呼ばれる朝貢交易が行われていました。サウエイ交易は1000年くらい前から始まったと考えている研究者もありますが、よくわかっていません。

○第Ⅲ期（700年前）…東ミクロネシア南部

太平洋地域への人の広がり、アジアからメラネシアを通過して東方のポリネシアへ一方のみで広がったわけではありません。およそ700年前に、ポリネシアから西へ逆戻りしてメラネシアやミクロネシアの島々に住み着いた人たちがいます。ポリネシアン・アウトライアーと呼ばれ、かれらはポリネシアの文化と身体的特徴を持っています。ミクロネシアでは、ミクロネシア連邦の南に位置するヌクオロ環礁とカピンガマランギ環礁がよく知られています。

長年にわたる各島の異なる環境への適応や安定した食生活の確保の結果、地域によって時差があるものの、人口増加を背景に社会構造に変化が起こった可能性があります。その変化なしには、多くの人たちの関与とそれをコーディネートする人物が不可欠な巨石文化の形成はありえないでしょう。

ミクロネシアの巨石文化

太平洋地域には、ポリネシアのイースター島のモアイ石像で代表されるように、巨石文化が存在していま



【写真2 ヤップの石貨（片岡撮影 2007 国立民族学博物館所蔵）】

が、一般的には英語名からストーンマネーと呼んでいます。円盤状で直径約20センチから45メートルまで大小さまざまで、中央に運搬用の穴があけられています（写真2）。ストーンマネーは、ヤップから南西に460キロメートル離れたパラオの結晶石灰岩で作られ、カヌーと筏で

運ばれました。ストーンマネーの年代はパラオの2カ所の石貨製作遺跡の発掘調査から、400年前以降に作られたことが明らかになっています（Fitzpatrick 2002）。日本の江戸時代に相当します。

日本統治時代の1929年当時には、1万3281個のストーンマネーがあったそうです。価値は大きさや重さだけではなく、形や色や質や製作に費やした労力や製作と運搬に関わる危険度などで決まります。嘘のような話ですが、ヤップでは今でもこのストーンマネーが使われています。ただし、集会所の落成式、賠償や謝罪、首長の追善供養など伝統的な使用です（小林2015）。

州の公印や車のナンバープレートにストーンマネーのデザインが使われており、ヤップの伝統文化にとつての重要性が表れています。ちなみに、1925年に

した。ミクロネシアでは、マリアナ諸島やヤップやパラオなど各地に形や構造が異なる巨石記念物が残されています。いくつか代表的なものを紹介しましょう。

マリアナ諸島には、紀元900〜1700年頃に作られたラッテストーンと呼ばれる高床式建物を支える床下の石柱が残っています。柱身（haigi）とその上に搭載される半円球状の柱頭（tasa）で構成されています（写真1）。3〜7対のラッテストーンを2列に並べて一棟を構築しており、村によって規模はいろいろですが数十棟で一村を構成していました。1602年にグアムの北にあるロタ島に住んでいたスペインのJuan Pobre（Driver 1983）は、グアムに400の村があったことを記録しています。また、San Vitores（Garcia 2004）は1668年には180の村落があり、海岸には50〜150棟の大型村落、内陸部には



【写真1 グアムのラッテストーン・パーク（片岡撮影 2017 国立民族学博物館所蔵）】

6〜20棟の小型村落が営まれたことを記録しています。

大きさは高さ1〜2メートルが一般的ですが、二つ例外があります。一つは、サイパンのすぐ南のテナアンにタガ・ハウストと呼ばれている6対12本で構築された巨大な

ヤップ島支庁長より寄贈された直径1・35メートルのストーンマネーが東京の日比谷公園に置かれています。代表的な巨石記念物を紹介しましたが、まだ他にもいくつか残されています。たとえば、パラオには年代は不明ですが、モノリスとよばれる巨大な建物の石柱やストーンフェイスと呼ばれる石に顔がレリーフされた巨石記念物が残っています。また、ミクロネシア連邦東部のナンマトル遺跡が築かれているポーンペイ島から約500キロメートル東に位置するコスラエ島には、600年前に最も栄えたレロ（レラ）遺跡と呼ばれるナンマトルに似た石積み遺跡があります。ミクロネシアは他の地域と比べ、実に多様で豊かな巨石文化が形成された地域と言えます。

次回、いよいよ世界文化遺産に登録されたナンマトルの出番です。楽しみにしていて下さい。

参考文献

Clark, Geoffrey, 2010. Micronesia. *Early Human Expansion and Innovation in the Pacific* by Ian Lilley (coordinator), pp.99-136. ICOMOS Thematic study
Driver, M. G., 1983. Fray Juan Pobre de Zamora and His Account of the Mariana Islands. *Journal of Pacific History* 18:198-216.
Fitzpatrick, Scott M., 2002. A Radiocarbon Chronology of Yapese Stone Money Quarries in Palau. *Micronesica* 34(2):227-242.
Garcia, F., 2004. *The Life and Martyrdom of the Venerable Father Diego Luis de San Vitores S. J.* Edited by James A. McDonough and Translated by Margaret M. Higgins. Felicia Plaza, and Juan Micronesian Area Research Center, University of Guam, Mangilao.
印東道子, 2010.「ミクロネシア - 多様性の中で生きる人々」『オセアニア』朝倉世界地理講座 - 大地と人間の物語 -15. 熊谷圭知・片山一道（編）225-236 頁, 朝倉書店
小林繁樹, 2015.「世界最大の貨幣」『ミクロネシアを知るための60章』印東道子（編）227-231.
Levesque, R. (ed.), 1992. *History of Micronesia: A Collection of Source Documents*. Volume 2-Prelude to Conquest. 1561-1595. Levesque Publications. Quebec.
山野 ケン陽次郎・片岡 修・Richard K. Olmo, 2013.「グアム島ハプト遺跡出土貝製品からみたラッテストーン周辺における諸活動と空間利用」『動物考古学』30:309-327.

【石巻市にて】



◆震災から6年、被災地の今を見る

滞在の半ばには、1泊2日の日程で宮城県石巻市へ赴き、被災地の現状を視察しました。石巻市の復興担当職員の案内で甚大な津波の被害があった小学校や公園を訪れ、また、震災直後も被災者の方々を支え続けた地元新聞の展示施設を訪問し、担当者から当時のエピソードを伺いました。実際に被災地を訪れ、人口が減少して悲惨な状態になった町や、未だに再建が進まない道路、建物を目撃し、震災時の津波の凄まじさを実感しました。また、2日目に

滞在中のスケジュール

4/15	若手リーダーが日本に到着
4/16	東京タワー、霞が関、皇居視察、HONDA ウェルカムプラザ青山訪問
4/17	上智大学・APICにてブリーフィング、外務省中南米局長との昼食会
4/18	築地市場視察、本所防災館、気象庁訪問
4/19	北嶋絞製作所訪問、JICA 訪問、江戸東京博物館、東京スカイツリー視察
4/20	石巻市へ移動、被災地視察
4/21	東松島市役所訪問、スマート防災エコタウン視察、瑞巖寺訪問、APIC 主催夕食会（報告会）
4/22	明治神宮、浅草、パナソニックセンター視察
4/23	若手リーダー帰国



【カリブ地域の地図（着色部分はカリコム加盟国）】



【地図を指差しながら説明するガードナー氏】



【左端から：ガードナー氏、一人挟んでブードゥー氏、一人挟んでJICA中南米部中米・カリブ課 中川岳春課長、リチャーズ氏、セント＝ヒル氏】

4月 カリブ若手リーダー招聘計画2017

本プログラムは、カリブ地域の国々から、次世代を担う若手リーダーを日本に招聘し、日本に対する理解を深めることを目的としています。今年はバルバドス、ジャマイカ、トリニダード・トバゴ共和国からそれぞれ1名ずつ、カリコム（CARICOM）事務局から1名、計4名の若手リーダーを招聘し、観光・防災・気象をテーマにJICA、気象庁、上智大学や企業、被災地などへの視察訪問を行い、日本のそれぞれの分野における取り組みを学びました。

今回招聘した若手リーダーは、ディボン・ガードナー氏（カリコム事務局エネルギー部門マネージャー）、カーティス・ブードゥー氏（トリニダード・トバゴ大学電子工学プログラムリーダー）、シヨーナ・ケイ・リチャーズ氏（ジャマイカ外務・対外貿易省二国間関係局長）、フィリップ・セント＝ヒル氏（バルバドス外務・対外貿易省儀典長）の4名です。

◆日本の文化に触れて

滞在中は、日本の現代的な文化から伝統的な文化まで様々な日本文化に触れました。滞在初日には、原宿の竹下通りや渋谷のスクランブル交差点を訪れ、日本の若者文化を感じ、六本木ヒルズの展望台

では、高層ビルが密集している大都会東京を実感していました。また、滞在中は榮太樓日本橋本店で江戸菓子の説明を受けたり、小津和紙の手漉き体験をしたり、築地市場ではマグロの競りの見学をしたりしました。現代の日本も昔ながらの日本も両方を感じられる充実した文化観光となりました。

◆日本の防災対策から学ぶ （本所防災館・気象庁訪問）

滞在中は、今回の訪日のテーマの一つでもある日本の防災や気象への取り組みを体験しました。防災関係の訪問先では講義を受講、さらに意見交換、疑似体験をしながら学びました。気象庁では、気象リスクが高い日本で、より正確な気象情報を提供するための努力や技術について、アジア太平洋気象防災センター予報官よりブリーフィングを受けました。また、実際に予報の作成や分析を行っている部署も視察しながら、気象庁の業務の説明を受けました。本所防災館では、地震、暴風雨、火災などの疑似体験を通して、災害の怖さや非常時の対応について学びました。特に地震体験、地震対策に関しては、身を守るための重要な知識を多く学ぶことができたようです。若手リーダーにとって、日本の防災や気象に対する取り組みを知り、日本から学ぶ貴重な機会となったようです。

外務省

杉山 晋輔 外務事務次官



1月 第332回 早朝講演会

APICでは毎月1回、外務省幹部や在外大使などを講師として、時局の外交課題や激動する国際情勢などを講演するAPIC早朝国際情勢講演会を開催しております。毎回、いま実際に進行中の国際情勢などのテーマについて質の高い話を聞くことが出来る機会として、参加者からの評価は極めて高いものがあります。

今回、2017年1月19日にホテルオークラにおいて第332回早朝講演会が開催されました。講師には杉山晋輔外務事務次官をお迎えし、「2017年の日本外交 課題と展望」という演題の下、講演が行われました。前回の2015年1月の第310回早朝講演会にて外務審議官（政務担当）と

してお越し頂いたこともある杉山次官は、今回で4回目の早朝講演会となります。

杉山次官からは、2016年の米国大統領選の結果をうけて、これからの日米外交や日露外交の展望などを中心に昨今の日本外交の概要について、ご自身の経験を踏まえたお話がありました。

講演の後には、会場の参加者との質疑応答の時間も設けられ、活発な意見交換が行われました。（小山）

（直近の早朝講演会の講師・テーマは、本誌37ページに掲載しております。）

また、これまで過去に開催された早朝講演会および次回の告知につきましては、APICのホームページ上でも確認することができます。）

略 歴

- 1976 外務公務員採用上級試験合格
- 1977 早稲田大学法学部中退
- 1995 総合外交政策局総務課企画官
兼大臣官房（事務次官秘書官）
- 同年 総合外交政策局国連政策課長
- 1998 条約局条約課長
- 2001 駐大韓民国日本国大使館 公使
- 2004 駐エジプト日本国大使館 公使
- 2007 大臣官房参事官
- 2008 地球規模課題審議官 大使
（第256回早朝講演会に講師として講演）
- 2011 アジア大洋州局長
（第276回早朝講演会に講師として講演）
- 2013 外務審議官（政務）
（第310回早朝講演会に講師として講演）
- 2016 外務事務次官
（第332回早朝講演会に講師として講演）

※ 2017 年 7 月現在

2月 第9回 国際協力懇話会

2月13日に、第9回国際協力懇話会を開催いたしました。講師に木寺昌人駐フランス共和国特命全権大使を迎え、東京倶楽部において講演が行われました。

木寺大使は、昨年の5月にも、前駐中華人民共和国特命全権大使として第8回国際協力懇話会で講演を行いました。今回は、日仏関係の近況などについて、駐フランス大使としてのご自身の経験に基づく貴重な話があった後、質疑応答の時間が設けられ、幅広く世界情勢について、講師と参加者との間で積極的な意見交換が行われました。



木寺 昌人

駐フランス共和国特命全権大使

略 歴

- 1975 外務公務員採用上級試験合格
- 1976 東京大学法学部卒業
- 1997 駐タイ日本国大使館 参事官
- 2000 駐タイ日本国大使館 公使
同年 大臣官房会計課長
- 2001 駐フランス日本国大使館 公使
- 2002 駐ジュネーヴ国際機関日本政府代表部 公使
- 2005 大臣官房審議官兼経済局
- 2006 大臣官房審議官
兼総合外交政策局 大使
- 2008 中東アフリカ局アフリカ審議官
同年 国際協力局長
- 2010 大臣官房長
- 2012 内閣官房副長官補
同年 駐中華人民共和国 大使
- 2016 駐フランス共和国 大使

※ 2017 年 7 月現在

ヤクモ株式会社代表取締役会長

舟木 いさ子 APIC 理事

APIC 役員
に聞く

略 歴

1974 年 ヤクモ株式会社入社
1996 年 ヤクモ株式会社 代表取締役社長
1996 年 デービー株式会社 代表取締役社長
2008 年 ヤクモ株式会社 代表取締役会長

1994 年 防音設備協会 会長
1998 年 日本振動技術協会 理事
2003 年 品川優申会 副会長
2009 年 品川法人会 副会長
2015 年 国際ロータリー日本青少年交換 理事長

※ 2017 年 7 月現在

本会報誌では、APIC の活動を支える理事・評議員へのインタビューを行っております。第4回となる「APIC 役員に聞く」では、舟木いさ子氏（ヤクモ株式会社代表取締役会長）にインタビューをお願いし、ご自身のロータリークラブの活動を踏まえた国際協力への見解と、若い世代へのメッセージについてお聞きしました。

【聞き手：APIC インタース生 馬場、武井（上智大学）】

Q1・国際協力に関わる上でどのような信念を大切にされていますか。

「継続すること」です。私はミクロネシア連邦チューク州へ何度も行きましたが、人々はここで、飲料用や洗濯のために雨水を貯めて生活をしていました。しかし、近年地球温暖化の影響で雨が降らなくなってしまう、水不足で新生児が次々と亡くなってしまうといった。島国だから、海水には恵まれていても摂取はできない。「助けない」という思いで、私達は海水を真水に変える機械を開発しました。それが、ロータリークラブの「チューク州離島への海水蒸留器設置プロジェクト」です。中国で、日本の10分の1のコストで製造し、ミクロネシアのチューク州へ寄贈しました。私自身が、使い方の説明もしました。その後、雨が降るようになったと聞いて安心しました。さすがに機械は捨てられたと思っていましたが、行ってみたらまだ使われていました。彼らは、海水が蒸発して残った塩を、魚の保存用にしていました。雨が降ったから機械を捨てるのではなく、塩を作るために再利用していたのです。塩で魚を保存すれば、売ることができます。産業の基盤もなく、電気もないようなところ。この1つのプロジェクト

クトで2つのことができました。切迫した問題であった、「子供の命を救う」ということ。そして、「保存を通して産業を支える」ということ。この経験から、国際協力には「継続」が大切だと実感しました。特に、ザビエル高校の奨学金制度は、長く続いて欲しいです。一時的に寄付を頂くだけではなく、どのようにして「続けていくか」ということが大切だと思います。

Q2・国際ロータリー第2750地区のガバナー※（議長）としてご活躍された舟木理事ですが、当時はガバナーとしてどのような理念を持って取り組まれていましたか？

やはり常に時代と共に変化し、活動を活性化することです。そこで私は、現代の多様性に対応できるように、「新しい風」が必要だと思いました。つまり、若い人材を取り込むことです。震災があった際は若い人たちがたくさんボランティアに行きました。こうした、挑戦心を持ち果敢な取り組みをする若い人たちの意見を聞くべきだと思います。私は6つの新しいクラブを作りました。仕事をする若い方々のために定例会の時間を昼から早朝や夜に変更したり、世界に散らばった人たちが繋がれるよう、インターネットでの会合も取り入れたりしました。

Q3・どのようなお気持ちの基に、毎年ザビエル高校留学生奨学金に多大なご協力をされていますか。

島国であるミクロネシアでは、学校まで行く船がないために、学校に通えない子供たちがいます。読み書きも、道徳も学べないんです。解決の糸口の一つとして、私はソーラーパネルを現地へ運び、電気が届く環境にして、パソコンで教育の機会を提供しました。自身のこういった経験から、ザビエル高校の学生の皆さんには世界を知ってほしいという思い

があります。そして、異国での経験を通して、自分の国を平和にするために考えるきっかけにしてほしいです。そういう意味を持って、ザビエル高校の学生の皆さんが日本に来てくれたらうれしいですし、私自身もそれを願って協力させて頂いております。

Q4・世界に貢献し、活躍する主体となるために、私達大学生が学生のうちに学ぶべきことはどのようなことだとお考えですか。

頭で考えるだけではなく、「実践すること」が大事だと思います。例えば、3年前フィリピンに大きな台風が直撃したとき、私はニュースで見聞きするのみでなく、自分で実際にフィリピンの現状を見に行きました。行ってみると、どこもかしこも瓦礫の山。多くの人が死に、何も無い。涙涙の状況でした。ある都市の市長さんに一番欲しいものを訊いたんです。というのも、災害に遭わなかった人々のお気持ちで衣類などの物資を送るのですが、届いた物資の置き場もないという問題があったりします。その被災地の現状に即した必要なものを知る必要がありますね。市長さんは、病院と仰いました。そこで、シンガポール、フィリピン、日本の三カ国で寄付を集めて病院を建てました。国際協力の中で、本当に必要とされているものは現場に行ってみないとわからないというのが私の実感です。知識を詰め込むだけでなく、実践する。「やってみる」ということです。

もう一つ大切なことは、寛容の心を持つことです。自分の考えが正しいと主張し続けるだけでなく、相手がどう考えているのか、「聞く耳を持つ」こと。今の学生の皆さんには、優しい心を持って、日本だけでなく世界中に貢献していく方になってほしいと思います。（武井）

◆インタビューを終えて◆

上智大学 外国語学部
2年生

武井 遥



今回の舟木理事へのインタビューを通して、日本社会を立て直していく時代にも、世界に目が向いた時代にも、同理事の座禅を基礎に置いた奉仕の精神が変わらずにあることを感じました。自らの経験を通して思いやりや寛容の心を身に付け、多様な場面で柔軟に実践していくことの大切さを学びました。

APICでのインタース全体を通しては、大学の外の「仕事」という世界での新たな学びが多くありました。今回任せて頂いたインタビューをはじめ、企画を進める際の段取りやマナー、チームの在り方などを学ぶことができました。

また、APICの太平洋島嶼国地域やカリブ海地域での国際協力を中心とした活動に多少とも関わる中で、自分の世界が広がったように感じます。フランス語を専攻している私にとってはあまり馴染みのなかったように思える同地域について、独特の文化など新しい発見がたくさんあったと共に、同地域のフランス語圏について知ること大学での学びとの共通点が見つけ嬉しく思いました。今回のインタースで、自分自身これらの地域に非常に魅了されました。

様々な新しい世界に出会うことのできた今回の貴重な機会を、将来に繋げていきたいと思えます。インタビューに応えて下さった舟木理事、APICの皆様と上智大学関係者の皆様に深く感謝致します。

第4期ザビエル留学生

—候補者2名決定—

APICと上智大学、ザビエル高校の3者による連携協定(MOU)に基づき、2014年に「上智大学・APICザビエル高校留学生奨学金」が創設されました。現在、第1期生のメアリー・ヘレンさん、第2期生のリサ・オウエさん、第3期生のミコ・ロンキリオさんがザビエル留学生として上智大学で勉強しています。第4期生となる今回は、リアナ・プレストン・アイロンズさんと、シヨーン・ミンギーさんの2名がこの秋、上智大学国際教養学部に入学することが決まりました。

—ザビエル高校—

ザビエル高校は1952年、ミクロネシア連邦チューク州ウエノ島にイエズス会によって設立されました。4年制の男女共学で生徒数は約150名になります。北大西洋地域で、最も著名な高校で、ミクロネシア連邦のみならず、パラオ共和国、マーシャル諸島共和国などからも生徒が集います。学生の学業水準はこの地域において最高水準であり、近年はアメリカで最も競争率の激しい奨学金の一つである、「ビル・ゲイツ奨学金」受給者を多く出していました。過去の卒業生には、モリ前大統領をはじめ、この地域の政界・経済界のリーダーを輩出しています。

第4期生



Shaun Mingii さん

「ザビエル高校時代に "Earth Council" という環境保護クラブに所属していました。高校の敷地内の清掃活動や、花壇づくり、イベント開催などを行いました。生徒たちに環境問題への関心を持たせ、構内のごみを減らすことができました。また、"Christian Life Community" というクラブにも所属していて、高校の近くにある地元の学校を訪問し、子どもたちに勉強を教えていました。地元の人々と絆をつくることができとてもやりがいのある活動でした。上智大学に入ったら、クラブに所属し、自分にできることで活躍したいです。」

第4期生



Liana Preston-Irons さん

「ミクロネシア連邦出身です。3歳のときにポンペイ州の幼稚園に入園し、翌年アメリカのカリフォルニア州に転園して4年間過ごしました。ポンペイに戻り、4年生として入学したのち、学力試験を受け、5年生に飛び級しました。私は常に「挑戦」を求めています。ザビエル高校に入学した最初の1年はホームシックになることもありましたが、2年目以降は勉強以外の様々な課外活動においても活躍できるようになりました。これまでの多くの成功体験や、挑戦し続ける精神が上智大学で活かされると思います。」

(APIC 翻訳)

上智大学入学に向けて、候補者2名のうち、1名からいただいたメッセージをご紹介します。

My Future in Japan By Shaun Mingii

For thirteen years I lived in Pohnpei; an island state of the Federated States of Micronesia (FSM). It was because I lived on this island during my childhood that I started wanting to travel to new places to see new things and to meet new people. I got tired of seeing the same things everyday. I wanted my days to be filled with excitement and surprises; not the same routines to which I had become accustomed. So when the opportunity for me to leave Pohnpei presented itself, I took it without hesitation.

That opportunity was for me to travel to Chuuk, another state of the FSM, and attend Xavier High School, the best high school Micronesia has to offer. I knew instantly that I belonged at this school because it gave me both the chance to study at a top school and to travel to a new place. My first three years at Xavier were great, but as senior year approached, I started seriously considering my future. I started asking myself questions. What do I want to become or what do I want to do in the future? More importantly, which college or university will best help me achieve my goals? I applied to a variety of colleges and universities just to expand my opportunities. Then, when my principal recommended Sophia University, I realized that it might be the best university fit for me. It is located in Japan, a place I have always wanted to visit, and is one of the top private schools in Japan. I know that it will be difficult for me to adjust to Japanese customs, but that is one of the reasons I want to study in Japan. I get to see new things, meet new people, and learn about their culture. While I push myself out of my comfort zone and grow as a person. So I put all of my effort onto the scholarship for Sophia University. I was overjoyed and relieved when I was notified that I had been offered the scholarship.

It is thanks to the supporters of this scholarship that I am able to pursue higher education in Japan. I am truly grateful for this opportunity. Without APIC, and all the other supporters and benefactors, studying in Japan would have been impossible for me. So for now, all I can say is thank you to all the supporters of the scholarship. Their generosity will not be put to waste. My future in Japan is set, and I look forward to everything ahead.

5月 ザビエル高校ベイカー神父来日 —上智大学にて改訂MOU署名式—

ザビエル高校を上智大学の海外指定校とする連携協定(MOU)が一部改訂され、2017年5月29日、ザビエル高校、上智大学、APICの三者により署名式が行われました。これにより、これまで毎年1人としてきたザビエル高校から上智大学への入学定員が2名に増員されることになりました。

上智大学は、2014年にザビエル高校を海外指定校とする連携協定(MOU)を締結して以来、毎年1名ずつザビエル高校の卒業生を留学生として受け入れてきました。APICでは「上智大学・APICザビエル高校留学生



【左から：上智大学暁道佳明学長、ザビエル高校ベイカー神父、APIC 佐藤嘉恭理事長】

奨学金」を立ち上げ、留学生の日本での生活を支援してきました。

2017年7月現在、3名の留学生が上智大学で学んでいます。改訂した連携協定(MOU)に基づき、同年9月には2名のザビエル高校卒業生が上智大学に入学することになりました。ミクロネシア地域と上智大学の関係が一層深まることとなります。

署名式のために来日したザビエル高校理事長デニス・ベイカー神父は挨拶の中で、上智大学とAPICに対する感謝を述べるとともに「上智大学で学んだザビエル留学生達が将来どんな大人になるのか、考えるのがとても楽しい」と述べました。また、ベイカー神父と供に来日した越智直樹イエズス会士(上智大学神学部出身)は、イエズス会の修練のためザビエル高校において聖書学等を教えており、9月に上智大学に入学予定の2名の生徒について話したうえで、「彼らが自分と同じように上智大学を母校と呼ぶことになるのが嬉しい」と述べました。

APICは、本留学生制度を通じてミクロネシア地域の発展に寄与できる人材の育成に取り組んでいます。

◆ご寄附のお願い◆

対象 ザビエル高校卒業生 毎年1～3名
留学先 上智大学国際教養学部、理工学部など
奨学金 卒業までの4年間の奨学金を授与

留学生を中・長期的に受け入れるためには、それにかかわる渡航費、入学金、授業料、生活費等とかなりの額にのぼることが見込まれます。皆さまからのご協力をお願い申し上げます。

銀行振込先

三菱東京UFJ銀行 本店(店番001) 普通口座1660339
口座名 一般財団法人 国際協力推進協会 奨学金募金口
カナ名 ザイ) コクサイ キョウリョク スイシン キョウカイ
※振込手数料はご負担をお願いしております。

皆様のご支援 ありがとうございます。

ザビエル留学プログラムは、上智大学の留学生基金の他、皆様のAPICへのご寄附により、2017年6月現在、総額約8184万円お預かりいたしました。皆様のおかげで、留学生は上智大学で充実した生活を送っています。誠に、ありがとうございます。御礼申し上げますとともに、本留学生制度に更なるご支援をお願いいたします。

最近の講師とテーマ

第 337 回 2017 年 6 月 15 日
外務省 アジア太平洋局南部アジア部長 梨田和也氏
「最近の東南・南アジア情勢と日本外交」

第 336 回 2017 年 5 月 18 日
外務省 国際協力局長 山田滝雄氏
「最近の日本外交における国際協力について」

第 335 回 2017 年 4 月 20 日
前駐ベトナム社会主義共和国 特命全権大使 深田博史氏
「発展するベトナムと日・ベトナム関係」

第 334 回 2017 年 3 月 16 日
外務省 中東アフリカ局長 上村司氏
「最近の中東情勢について」

第 333 回 2017 年 2 月 16 日
独立行政法人国際協力機構 副理事長 越川和彦氏
「日本の途上国支援の課題と展望」

第 332 回 2017 年 1 月 19 日
外務省 外務事務次官 杉山晋輔氏
「2017 年の日本外交 課題と展望」
※講演時の役職を記載しています。



【第 334 回早朝講演会にて】
外務省 中東アフリカ局長 上村司 氏

毎月 1 回開催される APIC 早朝国際情勢講演会では、外務省幹部、在外大使などを講師として、時局の外交課題や激動する国際情勢などについて講演が行われます。
現職の外務省局長、一時帰国中や退官直後の大使から、いま実際に進行中の国際情勢のテーマについて質の高い話を聞くことができる機会として、参加者からの評価は極めて高いものがあります。なお、APIC 維持会員の皆様には自動的にご案内するほか、非会員で参加をご希望の方にもご案内を行っております。詳細については、裏表紙に記載している APIC 事務局の連絡先にご照会ください。

【太平洋島嶼国開発協力事業】

太平洋島嶼国の信頼関係を構築し、友好関係の一層の推進を図るため、太平洋島嶼国の環境、エネルギー及び観光の分野における開発協力事業として、次のプロジェクトを実施する。

- ①太平洋諸国・大学生招待計画
- ②太平洋諸国・記者招聘計画
- ③太平洋諸国・リーダー招聘計画
- ④太平洋諸国・環境セミナー
- ⑤上智大学ミクロネシア・エクスポート・ジャーツアー支援
- ⑥ミクロネシア短期大学・学生招待計画
- ⑦APIC・MCT 協力事業（大学院生招待計画）
- ⑧Island Sustainability シンポジウム支援
- ⑨ナンマトル遺跡保存支援事業
- ⑩ミクロネシア写真展
- ⑪第 8 回太平洋・島サミット（PAL M）支援

【日・カリブ友好協力事業】

カリブ諸国の信頼関係を構築し、友好関係の一層の推進を図るため、カリブ諸国の環境、エネルギー及び観光の分野における開発協力事業として、次のプロジェクトを実施する。

- ①西インド諸島大学・大学生招待計画
- ②カリブ諸国・記者招聘計画
- ③カリブ諸国・リーダー招聘計画
- ④カリブ諸国・環境セミナー
- ⑤カリブ諸国・アニメ専門家派遣計画
- ⑥西インド諸島大学・学長招聘計画

【国際協力に関する講演会事業】

外務省幹部、在外大使、国際協力団体の幹部などによる時局の日本の外交課題や国際情勢などについての話題を提供する講演会として、毎月 1 回（8 月を除く）企画する。また、外交に取り組む政府関係者、国際政治経済の専門家を講師にお迎えし、小規模の懇話会を年数回実施する。

- ①APIC 早朝国際情勢講演会
- ②国際協力懇話会

【留学生奨学金事業】

若い世代の育成と人的交流の一環として、ミクロネシア連邦にあるザビエル高校から毎年、上智大学への留学生を迎えることとし、生活費等の支給を含め経済的に支援を行う。
本件留学生協定に基づき、2014 年 9 月より毎年 1 名、計 3 名が上智大学に入学している。2017 年秋からは、2 名を受け入れる予定である。APIC としては今後募金活動を積極化するとともに、留学生に対する生活費等の支給を含め留学の支援を行っていく。

（詳しくは、APIC ホームページをご覧ください。）

平成 29 年度収支予算

2017 年 6 月 15 日に開催された理事会及び評議員会において、平成 29 年度（2017 年 7 月 1 日から 2018 年 6 月 30 日まで）の「収支予算」及び「事業計画」が承認されました。詳細は下記の通りです。

収入の部		支出の部	
1. 収入	72,280,000	1. 事業活動支出	110,859,000
a. 基本財産運用収益	30,000	a. 太平洋島嶼国開発協力事業	32,600,000
b. 特定資産運用収益	48,000,000	b. 日・カリブ友好協力事業	46,000,000
(太平洋基金・カリブ基金)		c. 早朝講演会事業	5,400,000
c. 維持会員会費	19,000,000	d. 留学生奨学金事業	4,200,000
d. 受取寄付金	2,500,000	e. 事業間接費	22,659,000
e. 雑収入	2,750,000		
		2. 管理費支出	18,171,000
		a. 役員報酬・給与手当	7,845,000
		b. その他の管理費	10,326,000
当期収入合計	72,280,000	当期支出合計	129,030,000
前期繰越額	452,000,000	次期繰越額	395,250,000
合計	524,280,000	合計	524,280,000

【役員】

理事長：佐藤 嘉恭（最終官職：駐中華人民共和国特命全権大使）
常務理事：佐藤 昭治（最終官職：駐ミクロネシア日本国特命全権大使（兼パラオ・マーシャル諸島））
理事：荒木 恵 一般財団法人国際協力推進協会 事務局長（最終官職：財務省 国際局局付派遣職員（アジア開発銀行））
理事：坂本 吉弘 一般財団法人安全保障貿易情報センター 理事長（最終官職：通商産業省 通商産業審議官）
理事：炭谷 茂 社会福祉法人恩賜財団済生会 理事長（最終官職：環境省 事務次官）
理事：芳賀 達也 一般社団法人太平洋協会 事務局長
理事：舟木 いさ子 ヤクモ株式会社 代表取締役会長
理事：村上 洋 味の素株式会社 社外監査役
理事：山本 達也 エーオンジャパン株式会社 代表取締役社長
監事：金成 憲道 ドイツ証券株式会社 取締役会長
監事：兵藤 廣治 兵藤税理士事務所 税理士（最終官職：衆議院 大蔵委員会調査室長）

【評議員】

評議員：石堂 一成 東京コンサルティング株式会社 代表取締役社長
評議員：洪澤 健 コモンズ投信株式会社 取締役会長
評議員：島内 憲 元駐ブラジル連邦共和国特命全権大使
評議員：廣野 良吉 成蹊大学 名誉教授
評議員：本多 義人 東神インターナショナル株式会社 名誉会長



APICでは維持会員（法人会員・個人会員）を募集しております。

APIC 維持会員の皆様には毎月開催される外務省高官、大使による **APIC 早朝国際情勢講演会** を自動的にご案内するほか、非会員で参加をご希望の方にもご案内を行っています。詳細につきましては、APIC 事務局にご照会ください。

場所 ホテルオークラ東京 会議場

時間 午前8：30～10：00（朝食付き）

APIC 事務局 (TEL) 03-5577-2900 (FAX) 03-5577-2901
(E-mail) apicinfo@apic.or.jp

■発行人
佐藤嘉恭

■発行日
平成 29 年 7 月 1 日

■発行所
一般財団法人 国際協力推進協会
〒101-0054
東京都千代田区神田錦町 3-15-6
名鉄不動産竹橋ビル 7 階
TEL : 03-5577-2900 / FAX : 03-5577-2901
MAIL : apicinfo@apic.or.jp

■編集長
芳賀達也（理事）

■副編集長
加藤奈美
松尾彩花

■編集：APIC インターン生
大高彩果（津田塾大学）
大垣直哉（麗澤大学）
小山貴大（早稲田大学）
馬場葉月（上智大学）
武井遥（上智大学）